2025 年度
第 72 回 日本 PTA 北海道ブロック研究大会

宗谷管内・稚内大会

大会集録

大会スローガン

『てっぺんから広げよう！ 子育ての輪と和と話』

大会主題

「未来を担う子どもたちの今とこれからの幸せ（well being）を願い、
学び合い、連携し合う PTA をめざして」

主催：日本 PTA 北海道ブロック協議会（北海道 PTA 連合会・札幌市 PTA 協議会）
主管：稚内市連合 PTA　宗谷管内 PTA 連合会

2025年度　第72回日本PTA

北海道ブロック研究大会

宗谷管内・稚内大会

期　日

2025年10月4日（土）・5日（日）

会　場

サフィールホテル稚内・稚内総合文化センター

稚内東中学校・稚内南小学校・稚内南中学校・潮見が丘小学校

主　催

日本PTA北海道ブロック協議会（北海道PTA連合会・札幌市PTA協議会）

主　管

稚内市連合PTA　宗谷管内PTA連合会

後　援

公益社団法人日本PTA全国協議会　文部科学省　北海道　稚内市　猿払村　浜頓別町
中頓別町　枝幸町　豊富町　礼文町　利尻町　利尻富士町　幌延町
北海道教育委員会　稚内市教育委員会　猿払村教育委員会　浜頓別町教育委員会
中頓別町教育委員会　枝幸町教育委員会　豊富町教育委員会　礼文町教育委員会
利尻町教育委員会　利尻富士町教育委員会　幌延町教育委員会
北海道小学校長会　北海道中学校長会　宗谷校長会　稚内市校長会　猿払村校長会
浜頓別町校長会　中頓別町校長会　枝幸町校長会　豊富町校長会　礼文町校長会
利尻町校長会　利尻富士町校長会　幌延町校長会
北海道公立学校教頭会　宗谷公立学校教頭会　稚内市教頭会　猿払村教頭会
浜頓別町教頭会　中頓別町教頭会　枝幸町教頭会　豊富町教頭会　礼文町教頭会
利尻町教頭会　利尻富士町教頭会　幌延町教頭会　公益社団法人日本教育会

目 次

ごあいさつ

宗谷管内・稚内大会 大会長　廣 瀬 堅 一 …… 1

宗谷管内・稚内大会 実行委員長　出 村 賢 志 …… 2

函館市ＰＴＡ連合会 会長　秋 山 慎一郎 …… 3

宗谷管内・稚内大会概要 …… 4

分科会一覧 …… 5

分科会

第１分科会 …… 6

第２分科会 …… 10

第３分科会 …… 14

第４分科会 …… 19

第５分科会 …… 23

特別第１分科会 …… 27

特別第２分科会 …… 31

記念講演 …… 35

大会スナップ …… 39

ご来賓名簿 …… 47

大会役員名簿 …… 48

実行委員名簿 …… 49

編集後記 …… 50

ごあいさつ

第７２回日本ＰＴＡ北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会 稚内市連合ＰＴＡ

大会長　廣瀬　堅一

令和７年１０月４日・５日の２日間、第７２回日本ＰＴＡ北海道ブロック研究大会宗谷管内・稚内大会が、ご来賓の皆様そして全道各地の会員の皆様お集まりのもと、盛大に開催できましたことに心より感謝申し上げます。また大会開催にあたり、開催地であります稚内市ならびに稚内市教育委員会をはじめさまざまな関係機関の皆様には、大会成功にむけひとかたならぬご支援を賜り、ご尽力いただけましたことを重ねて御礼申し上げます。さらに、出村賢志実行委員長陣頭指揮の下、川原修子事務局長の用意周到な差配、杉本旬事務局次長の微に入り細を穿つ運営は大会が成功した大きな要因であると感じております。この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

さて、「てっぺんから広げよう！子育ての輪と和と話」をスローガンに、大会主題を「未来を担う子どもたちの今とこれからの幸せ（well being）を願い、学び合い、連携し合うＰＴＡをめざして」と銘打った本大会は、北海道各地の優れたＰＴＡ活動を最北の地稚内に集めて、その成果を北海道にとどまらず全国に広げるに値する大会になったのではないかと思います。

各分科会のテーマからは、「ＰＴＡと地域」「家庭教育のあり方」「笑顔でつながる」「学校と地域」「会員のニーズ」などのキーワードがみられ、ＰＴＡが何を大切にして活動したらいいのか、だれとともに力をあわせていけばいいのかを交流し合うよい機会となったと思います。実際、私も分科会を参観させていただきましたが、参加者一人一人が放つ熱量の強さに感動させられました。広大な地であるこの北海道のさまざまなところに同じ志を持って真剣に考え積極的に活動をすすめている人たちを目の当たりにして、とても嬉しい気持ちでいっぱいになりました。

記念講演には宮沢和史さんに来ていただきました。「戦後８０年を迎えて～沖縄と北海道から平和を願う～」との演題で、聴く者全ての心にしみわたるお話をしていただきました。物事を深く知り、そこに寄り添いながら発信していく宮沢さんの想いや訴えはとても大切な何かを私たちに与えてくれたと感じました。

研究大会は学び合いの場であることはいうまでもありませんが、一日目の夜に開催された情報交換会は参加者同士腹を割って話し合う、学びとはまた別の方法で私たちのよこのつながりや仲間意識を深めるものとなりました。

世の中の不確実性が高まり、子どもたちは激しい変化が止まることがない時代を生きていくことになるといわれています。そのような社会で私たちＰＴＡの会員は、多様な他者と当事者意識をもった対話により問題を発見・解決できる「持続可能な社会の創り手」を育てていく必要があります。こういう時だからこそ、今みたいな時代だからこそ、こんな世の中だからこそ、保護者、校長先生を初めとする教職員の皆さん、地域の方々が力と気持ちを合わせ、よこのつながりを強くして、未来を担う大切な北海道の子どもたちを見守っていければいいなと思います。北海道ＰＴＡ連合会といたしましても、その思いを強く持ち、多くの会員が楽しく参加できて学び合えるＰＴＡ活動が全道各地で展開されるよう今後も取り組んで参ります。

結びになりますが、本大会にかかわってくださった全ての方々が明日からも力を合わせて子どもたちのための活動ができるよう祈念して大会への御礼の言葉といたします。ありがとうございました。

ごあいさつ

第７２回日本ＰＴＡ北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会 稚内市連合ＰＴＡ

実行委員長　出村　賢志

第７２回日本ＰＴＡ北海道ブロック研究大会 宗谷管内・稚内大会の開催にあたり、全道各地よりお越しいただきました皆さま、ご臨席を賜りましたご来賓の皆さま、そして大会の準備・運営にご尽力いただきましたすべての関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。「てっぺんから広げよう！子育ての輪と和と話」を大会テーマとして、稚内の地に多くの皆さまをお迎えし、盛大に大会を開催できましたことは、実行委員会一同の大きな喜びでございます。

広大な宗谷管内ではそれぞれの市町村の距離が長く、また離島の学校もあり、移動の負担が大きく対面での実行委員会の開催が難しい地域ですが、準備期間中はオンライン会議を重ね、各市町村がそれぞれの役割を担い、分科会の企画、広報活動、会場整備、交流企画など多岐にわたる業務を分担しながら進めてまいりました。決して容易な準備ではありませんでしたが、「宗谷管内稚内大会を必ず成功させたい」という強い思いで、時間を合わせ、議論を重ねて歩みを進めてきました。この過程そのものが、PTAの原点である“つながりの力”を改めて実感させてくれました。

初日の分科会では、提言者の皆さまの想いが熱く伝わり、どの会場でも活発な意見交換が行われました。参加された皆さまが真剣に耳を傾け、より良いPTA活動や地域づくりについて語り合う姿を見て、宗谷での開催に込めた私たちの願いが形になったように感じました。また、情報交換会では、稚内出身の兄弟デュオ「SE-NO」による演奏等により笑顔と歓声のあふれる時間となりました。北の地ならではの温かさと力強さを感じていただけたのであれば幸いです。

２日目の全体会では、南中ソーランの迫力あるオープニングで幕を開け、会場全体が一つになる高揚感に包まれました。続く全体会、宮沢和史氏による講演会では、子どもたちの未来をどのように支えていくべきか、そして私たち大人がどのように関わるべきか、平和への願いについてを深く考えるきっかけをいただきました。参加者の皆さまにとっても、自身のPTA活動や日々の子育てを見つめ直す貴重な時間となったことと思います。

近年、PTAのあり方についてさまざまな意見が交わされる中で、今回の大会を準備する過程で私たちが強く感じたのは、「子どもたちの健全な成長は地域みんなで支える」というシンプルでありながら、とても大切な原点です。学校・家庭・地域が互いに支え合い、限られた時間の中で子どもたちと向き合う――その積み重ねこそが、未来を豊かにする力になると信じています。

皆様がこうして稚内に集い、共に学び、語り合いながら築いたつながりは、必ずや明日からの活動の力になるはずです。改めて、本大会のためにご尽力いただきました関係者の皆さま、各校PTAの皆さま、子どもたちを見守ってくださるすべての皆さまに、心より御礼申し上げます。

本大会が皆さまにとって実りある学びの場となり、PTA活動の一助となれば幸いです。北のてっぺん・宗谷の地で過ごしたこの時間が、皆さまの心に温かく残り、未来への力となりますよう願い、実行委員長としての挨拶とさせていただきます。

ごあいさつ

函館市ＰＴＡ連合会

会長　**秋山　慎一郎**

この度は、日本最北端の地、稚内市におきまして、第７２回日本ＰＴＡ北海道ブロック研究大会宗谷管内・稚内大会が盛大に開催され、大成功を収められましたこと、心よりお祝い申し上げますとともに、開催にあたりご尽力いただきました関係者の皆様に、心より感謝を申し上げます。

さて、令和８年度に第７３回北海道ブロックＰＴＡ協議会研究大会　道南大会を開催させていただく事となり、開催を任せられた渡島ＰＴＡ連合会・檜山ＰＴＡ連合会・函館市ＰＴＡ連合会の３連合会は、今から身が引き締まる思いです。歴史あるこの大会を任せられる責任の重さはもちろんですが、幾多の偶然が重なり、この身に余る役割を頂戴したことに感謝をし、関係者一同手を取り合って歩き始めたところです。

道南大会は、大会主題として「親と子どもの豊かな成長をめざして」。大会スローガンを「親も子も笑顔になれる　学びと子育ての　みちしるべ　～過去を受け継ぎ、今を楽しみ、未来を語ろう～」と掲げさせていただきました。ＰＴＡ活動の本質である各単Ｐに受け継がれているそれぞれの活動。この活動は、その地域やその学校の環境に基づいた活動であり、守り続けていかなければならない大切なものですが、現代の教育環境や地域環境は常に進歩し、変化し続けています。その変化に対応し、我々のＰＴＡ活動も時代に合わせてバージョンアップしなければなりません。前述のとおり道南大会は３つの連合会が手を取り合い、作り上げていく大会です。教育・子育ての環境が全くちがう３つの連合会が力を結集することで化学反応をおこし、無限のアイデアが生まれてくると信じています。ＰＴＡ活動が持続可能なものであり続けるために、その無限のアイデアを、皆様が今後進むべき「みちしるべ」としていただけるような、そんな大会にしたいと考えております。

宗谷管内・稚内大会では、たくさんのことを学ばせていただきました。そして大会関係者の皆様の情熱と信頼、連携、笑顔にたくさん触れる事が出来ました。この宗谷管内・稚内大会で得た経験は、間違いなく私たち道南大会のスタッフに受け継がれ、さらにバージョンアップし、北海道各地のＰＴＡの皆様にご満足いただける道南大会を作り上げるための基盤となるでしょう。

最後になりますが、改めまして他のお手本となるような素晴らしい大会を作り上げて下さった宗谷管内・稚内大会の関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。我々道南大会も負けないような大会を作り上げてまいりますので、多大なるご支援とご協力をお願い申し上げます。道南大会関係者一同、函館市にて皆様をお待ちしております。次第に寒さが身に染みる季節となってまいりました。皆様のご健康とご多幸を、そしてすべての子どもたちの幸せをお祈り申し上げます。

宗谷管内・稚内大会概要

1 大会スローガン　『てっぺんから広げよう！子育ての輪と和と話』

2 大会主題　「未来を担う子どもたちの今とこれからの幸せ（well being）を願い、学び合い、連携し合うPTAをめざして」

3 主催　日本PTA北海道ブロック協議会（北海道PTA連合会・札幌市PTA協議会）

4 主管　稚内市連合PTA　宗谷管内PTA連合会

5 後援　公益社団法人日本PTA全国協議会 文部科学省 北海道 稚内市 猿払村 浜頓別町 中頓別町 枝幸町 豊富町 礼文町 利尻町 利尻富士町 幌延町 北海道教育委員会 稚内市教育委員会 猿払村教育委員会 浜頓別町教育委員会 中頓別町教育委員会 枝幸町教育委員会 豊富町教育委員会 礼文町教育委員会 利尻町教育委員会 利尻富士町教育委員会 幌延町教育委員会 北海道小学校長会 北海道中学校長会 宗谷校長会 稚内市校長会 猿払村校長会 浜頓別町校長会 中頓別町校長会 枝幸町校長会 豊富町校長会 礼文町校長会 利尻町校長会 利尻富士町校長会 幌延町校長会 北海道公立学校教頭会 宗谷公立学校教頭会 稚内市教頭会 猿払村教頭会 浜頓別町教頭会 中頓別町教頭会 枝幸町教頭会 豊富町教頭会 礼文町教頭会 利尻町教頭会 利尻富士町教頭会 幌延町教頭会 公益社団法人日本教育会

6 参加者　道内PTA会員ならびに教育関係者

7 参加費　5,000円（情報交換会は別途７,000円）

8 大会日程と会場

【第１日目　10月4日（土）】稚内市内７会場・サフィールホテル稚内

分科会（稚内市内７会場 開催）

- 第1　稚内総合文化センター　小ホール（稚内市中央３丁目13-23）
- 第2　稚内東中学校 体育館（稚内市潮見5丁目1-29）
- 第3　稚内東中学校 図書スペース（１F）（稚内市潮見5丁目1-29）
- 第4　稚内南小学校（稚内市緑1丁目11-8）
- 第5　稚内総合文化センター美術室（稚内市中央３丁目13-23）
- 特1　稚内南中学校（稚内市緑1丁目2561）
- 特2　潮見が丘小学校（稚内市富岡4丁目3-3）

情報交換会　サフィールホテル稚内（稚内市開運1丁目2-2）

11:45　12:00　13:30　14:00　17:00　18:00　20:00

運営者受付	運営打合せ準備作業（分科会毎）	受付	**開会式・分科会** ※開会式は各会場にて開催※	休憩・移動	**情報交換会** サフィールホテル稚内

【第２日目　10月5日（日）】稚内総合文化センター大ホール（稚内市中央３丁目13-23）

8:30　9:00　9:15　10:00　11:30　12:00

受付	アトラクション	**全体会**	**記念講演**	閉会行事

分科会一覧

第１分科会　組織運営　函館市PTA連合会

テーマ　**学校を支えるためにＰＴＡと地域ができること**

提言１　函館市の取組から学ぶ、私たちにできる安全環境づくり

提言２　学校を支える意義と私たちにできること

第２分科会　家庭教育　日高地区PTA連合会

テーマ　**生活リズムを考える～親子の絆を育む家庭教育の重要性～**

提言１　乱れがちになる夏休み、冬休みの生活リズムの確立を意識した取組について

提言２　長期休業中の過度なメディア利用を防ぐ取組について

第３分科会　学校支援　札幌市東区PTA連合会

テーマ　**「学校・子ども・保護者が笑顔でつながり合える学校支援のあり方」**

提言１　学校の実態に即した学校支援のあり方

提言２　連携が深まり、持続可能なこれからの学校支援

提言３　「語り合おう ～笑顔が広がるために」

第４分科会　地域連携　札幌市白石区PTA連合会

テーマ　**子育てを支える学校と地域とのつながり**

提言１　「地域・学校～人と人をつなぐキラリ☆人」

提言２　「これからのＰＴＡの在り方を探る！」～思い描く学校と地域の連携とは

第５分科会　食育・情報　旭川市PTA連合会

テーマ　**「会員のニーズに対応した情報発信と取組」**

提言１　会員が主体的に参加するための地区Ｐ連の活動及び情報発信とは
どういうものか実際に研究会を企画してみよう！！

特１分科会　中学生討論会　稚内市連合PTA・南地区

テーマ　**「明日も通いたくなる学校ってどんな学校？」**

提言１　明日も通いたくなる学校にするために各校でどんな取組ができるのか

提言２　明日も通いたくなる学校にするために大人に協力してもらいたいことは何か

特２分科会　地域課題　稚内市連合PTA

テーマ　**講演「命の参観日」**

提言１　『多文化共生』「多様性を受け止めること」についての意見交流

提言２　講演内容についての感想交流

第１分科会【組織運営】

学校を支えるためにPTAと地域ができること

協議の柱

1. 函館市の取組から学ぶ、私たちにできる安全環境づくり
2. 学校を支える意義と私たちにできること

	所属・役職名	氏　名	所属単P名，他
提言者・実践発表者	函館市ＰＴＡ連合会副会長	小林　庸一	函館市立巴中学校ＰＴＡ会長
ＰＣ担当	函館市ＰＴＡ連合会事務局員	大橋　香代子	函館市ＰＴＡ連合会事務局
司会者	函館市ＰＴＡ連合会事務局長	中村　和代	函館市ＰＴＡ連合会事務局
助言者	稚内市立富磯小学校校長	内山　淳司	稚内市立富磯小学校長
運営者	単Ｐ事務局	遠藤　敦志	稚内市立大岬小学校ＰＴＡ事務局
	単Ｐ役員	須藤　未佳子	稚内市立大岬小学校ＰＴＡ会役員
記録者	単Ｐ事務局	下山　康弘	稚内市立天北小中学校ＰＴＡ事務局
運営委員長（分科会責任者）	単Ｐ会長	本間　寛隆	稚内市立大岬小学校ＰＴＡ会長

第１分科会　提　言　要　旨

子ども達の安心安全な環境づくりを目指して
～ ＰＴＡと地域ができること ～

提言者　函館市ＰＴＡ連合会副会長
函館市立巴中学校ＰＴＡ会長　小林　庸一

函館市PTA連合会

昭和50年6月10日設立。今年度は設立50周年。

〇特色ある事業

- 単Ｐ会長研修・交流会（年2回）
- 会報発行（年2回、全戸配布）
- 青函PTA交流会（38回）
- 教育長と教育予算要望の懇談会
- 新年交礼会
- 情報ハンドブックの作成公開　など

函館の現状

平成28年度からの再編統合により校区が広くなり、地頭生徒の登下校や放課後を過ごす環境への不安の声が保護者と学校両方からあがった。このような現状から、令和元年度、函館市内の全市立学校に学校運営協議会が設置。コミュニティスクール（CS）が導入される。

どのような活動がなされているか

〇令和元年度

新たに始めた活動ではなく以前から町会と連携、交流して行っていた活動が主。

- 小学校は祭りやバザーの出店や共同開催。運動会など学校行事や町会の行事交流
- 中学校は小、中複数の学校同士の情報共有。校外生活委員会の設置

〇令和6年度

今までの活動に加え、新たな活動も実態に合わせて増やしていった。

- 小学校は見守り、交通安全指導、防災、祭りやバザー協力、業界行事の交流。
- 中学校は情報共有をさらに密にし、CSにPTA会長が所属する形で連携を強化していった。

今回は特に見守り活動について、実践例を報告しながら活動の特色について深めていく。

見守り活動の実践例

〈函館市立大森浜小学校〉

平成31年4月、3つの小学校が統合し誕生。校区が広くなり登下校が心配であるとの声を受け、新体制となったPTAが学校長とともに地域コーディネーターに相談。

「大森浜小子ども見守り隊」が発足。

〇「大森浜見守り隊」の活動。

- 児童の登下校時に自宅周辺を気軽に見守る活動。
- 安心の目印の「オレンジバンダナ」を身に付け活動。
- コロナ禍により見守り隊員が減少するも、スタイルを変えながら徐々に復活。

〈函館市立昭和小学校〉

元々はPTAの生活研修部が見守り活動を担当していたが、時間帯、人員確保の負担が増したことから、地域コーディネーター、学校運営協議会、学校関係者、町会の協力を得て、令和4年度に「昭和小地域安全見守り隊」が発足。

〇「昭和小地域安全見守り隊」の活動。

- 「ピンクのバンダナ」を身に付け、子どもたちに安心を伝えている。
- 都合のつく日にバンダナを身に付け、登下校時や放課後に自宅前で見守り。
- 笑顔で元気よく声をかけることで、子どもたちも笑顔に。

今後もPTAが地域の大人と協力して子どもたちを見守り育てる持続的な活動を行っていきたい。

第1分科会　協議記録

討議の柱①

函館市の取組から学ぶ、
私たちにできる安全環境づくり

- 完全ボランティア制にし、地域全体で行える工夫をする。例えば、散歩やマラソンが好きな人にお願いをするなど。
- PTAの体制を役員で縛ることなく、好きな時、協力できるときに参加可とすることで、負担感を減らす。
- SNSやQRコードなどICTを活用することで、気軽に見守り活動に参加できるようにしている。
- 見守り活動に協力してくれるPTAの方が多い。その反面、次の世代が生まれないのが課題。
- 企業や経営者さんを巻き込むと、安全見守りにも幅ができるのではないか。
- あいさつ運動などに取り組むも、不審者扱いされるなどの問題もあり。見守り活動をどう展開するかという仕掛けづくりが大切。
- 函館市と同じように学校統廃合によって環境が変化したため、防犯対策としての見守りの必要性がでてきた。
- 小規模校ならではの地域ぐるみの体制によるメリットがある。大都市の関係性の希薄さをCS制度でカバーできるかが今後の課題。
- 関係性が構築されてない中では、声掛けする難しい。最悪不審者扱いになる。

討議の柱②

学校を支える意義と私たちにできること。

- PTAの活動が地域に見えていない現状があったので、広報誌などで「可視化」をして、地域を巻き込んだ活動を目指している。
- 子どもたちの教育活動を支えるためには、保護者にも知識が求められる。教育的な学びを今後も大切にしていきたい。
- 義務的なことばかりでは、持続的な取り組みにはならない。大人も楽しみながら活動することが大切。
- 活動が年度限りにならないように、CSなどのサポート制度が仕組みとして定着し残るのが理想。
- 部活動の地域意向が進められているが、誰が責任者になるのかや、送迎の関係での不安が解消されていない。
- 校区の地域の方であれば「読み聞かせ」や「かざりつけ」などの活動を子どもが学校に通ってない場合でも協力を可能にした例がある。
- PTA、CS、市町村、NPO法人、警察など、それぞれの活動をネットワーク化してつなぎ、持続可能な取り組みが、これからの時代は大切になるのではないか。
- なり手不足などによる教職員の減少を見据え、地域社会が教育に関わっていけるシステム作りが求められる。

第１分科会　助言者より分科会まとめ

【提言内容の交流に関わって】

函館市PTA連合会全体の取組と分科会での交流から、取組の方向性を揃えるまでの準備や動きの大変さが伝わった。全市的な連携が前提にあることで、より安心安全な取組につながっている。

「大森浜小子ども見守り隊」の活動では、たくさんの協力者を得るため、生活のスタイルに合わせて無理なく参加できることや、オレンジのバンダナで子どもに安心感を与える工夫がなされていることに感銘を受けた。「昭和小地域安全見守り隊」の活動もピンクのバンダナで子どもに安心感を与えるとともに「笑顔でつながる」ことを大切にした子どもにとって大変良い取組になった。

【働き方改革に関わること】

文科省による第２回教師を取り巻く環境特別部会「学校と教師の業務の３分類」で、働き方改革のアップデートの提言があった。働き方改革は、教師が教師でなければできない業務に専念するための施策であり、学校以外が担うべき業務を整理し、教師以外が積極的に学校に関わっていくことが今後求められる。函館市が行った「登下校の見守り活動」が上記３分類の「学校以外が担うべき業務」の最初に記載されている。函館市の取組がPTAの活動として先進的であり、子どもの安心安全な活動につながっているので、この取組を参考に各校の活動に生かしていただきたい。

【時代の変化によるPTAの役割の変遷】

私が教師になった30年以上前と比べてPTAの在り方は大きく変化した。保護者の皆さんのライフワークの変化により、PTA活動への参加が難しくなったことや、コロナ禍を経て、PTAの存在意義も各所で論じられた。保護者、地域の協力のありがたさを感じる反面、様々な課題が浮き彫りになってきた。

また、PTA活動について学校の希望や実態に応じて課題が二極化してきている。仮説を立てると、大規模校では、PTA数が多いので活動がしやすい反面、協力者の固定化、人数減少、活動のマンネリ化が見られる。小規模校では、地域保護者の理解により、協力体制が良好になる傾向があるが、時間的な制約により活動の幅を広げることが難しい場合もある。

私の前任校のPTA活動においては、協力者が年々減少することやそのことが原因で様々な活動で教職員が対応する場合があること、活動のマンネリ化によるやらされ感などの課題があった。それを解消するためにPTAみんなで知恵を出し合い、役職のスリム化や一人一係制（エントリー制）を導入することで、自主的に参加する流れを作り成果を上げることができた。

【今後のPTA活動に向けて】

今後のPTA活動に向けては、次のようなことが求められる。

一つ目は、参加しやすいこと。オンライン会議などICTを活用したり、短期プロジェクトで参加のハードルを下げたりすることで「やりたい人が、やりたいときに、やれることを」を実現することが大切になる。

二つ目は、強制しないこと。参加者に強制を強いるようなことはあってはいけない。

三つ目はスリム化。役職のスリム化や事業の断捨離を、外部のサポートなども利用して行っていく必要がある。また、前年度踏襲ではなく、現在に見合った活動をゼロベースで考えていくことも大切である。

四つ目は、楽しい活動を行うこと。子どもに還元される活動を、大人たちも楽しみながら行うことが重要である。

このように、「完璧を目指さず、できることから始める」ことや「対話を重ね、PTA活動を楽しめる場やつながれる場にする」ことが必要である。最終的には、対話による信頼関係が最も重要である。学校と保護者が信頼関係を築き、お互いを尊重しながら活動することで、明日からのPTA活動がさらに良くなることを願っている。

第２分科会【家庭教育】

生活リズムを考える
～親子の絆を育む家庭教育の重要性～

協議の柱

1. 乱れがちになる夏休み、冬休みの生活リズムの確立を意識した取組について
2. 長期休業中の過度なメディア利用を防ぐ取組について

	所属・役職名	氏　名	所属単P名，他
提言者・実践発表者	浦河第二中学校 ＰＴＡ	森　真治	浦河町立浦河第二中学校・校長
司会者	日高地区ＰＴＡ連合会事務局長	佐藤　恵美	様似町立様似中学校・校長
助言者	健康運動指導士	門間　奈月	宗谷健幸人プロジェクト代表 教育委員
運営者	稚内市立稚内東中学校校長	吉崎　健一	稚内市立稚内東中学校 PTA 事務局
	稚内市立稚内東小学校副会長	谷口　亮介	稚内市立稚内東小学校 PTA 役員
記録者	稚内市立声問小学校校長	末村　哉子	稚内市立声問小学校 PTA 事務局
運営委員長（分科会責任者）	稚内市立稚内東中学校ＰＴＡ会長	池田　光彦	稚内市立稚内東中学校 PTA 役員

第２分科会　提　言　要　旨

「家族で取り組む規則正しい生活リズムの確立」
～朝活３０の取組を通して～

提言者　浦河第二中学校PTA　森　真治

【1】浦河第二中学校の紹介

○　今年度創立７９年という長い歴史がある学校だが、今年度をもって閉校となる。

○　同一校区の浦河東部小学校と隣接しており、連携・協力体制をとっており、専門部会や役員会などを合同で行っている。

○　生徒数１９名４学級（特別支援学級１学級）

○　主なPTA活動
- 研修部：各PTA研究会への参加の促進
- 厚生部：校地内の環境整備、体育大会の協力
- 学年PTA：各学年の親子レクの企画推進
- **夏、冬休み期間中に実施する『朝活３０』**

○　CSとPTA地域連携の活動
- 地域と連携した防災教室の取組

【2】生活リズムの課題～休み中の過ごし方～

子どもの寝る時間が遅い、睡眠時間が少ない、朝起きるとボーっとしていたり体調がよくなかったりなど、子どもたちの生活習慣・リズムを改善したいと感じているご家庭は少なくないと思います。

特に学校がない夏休みや冬休みは、テレビやデジタル端末の見過ぎによる夜更かしや、朝寝坊などで生活リズムが乱れがちです。

子どもたちの健やかな成長のために、生活リズムを整えることは非常に大切ですが、有効な手立てをたてられず、何かいいものはないかと悩んでいるご家庭が本校でも多くあり、役員会の中でも時折話題に上がっていました。

【3】家族で考え、話し合うきっかけ作り

本校の生徒指導の一つとして取り組んでいた『朝活３０』を、生活リズムが乱れがちの夏・冬休みの活動として、取り組んでみてはどうかとPTA役員会の中で話題になり、取り組むようになったのが始まりでした。

読書や家事などの手伝い、体力作りなど朝に取り組みたいことを生徒自身が考え、保護者と相談しながら取り組むという内容です。また、記入する中身も生徒と保護者両方の負担にならないように工夫していきました。

忘れてしまったり怠けてしまったりする時もありますが、その都度声掛けをしたり、生活習慣について話し合ったり、生徒が考えるきっかけになったりするなどの効果が見られました。

【4】デジタル機器・メディアの過度の利用を防ぐ

子どもたちの生活習慣の変化は、現代の生活様式の変化や、アウトメディアの依存や過度の利用が原因の一つと思われます。端末やゲームは、子どもたちには魅力的であり、手放すことができないものかもしれません。休み期間中は、さらにその利用時間が多くなってしまい、新学期に影響を及ぼすこともあります。

朝活３０の活動を通して、改善が見られたところもあれば、あまり変わらなかったこともあったようですが、家族で話し合うきっかけ作りになったという家庭もあったと聞きました。

子どもも長い時間ゲームばかりやるのはよくないと頭では理解しているようです。でもつい誘惑に負けてしまい、ダラダラと過ごしてしまう、それが現状のようです。その状況を直していくために、話して、振り返って見つめ直す機会をつくり、自分なりの行動目標を立てて、取り組んでいるところを褒めて、認めてあげられたらと思います。

【5】今後に向けて

冒頭で述べた通り、本校は今年度をもって閉校となります。今まで続けてきたこの活動も、来年度も続けられるかはわかりません。しかしながら、生活リズムを整えていくこと、家族での会話を減らさないようにすることを心がけ、これからも生活リズムの改善に取り組んでいけたらと思います。

第２分科会　協　議　記　録

討議の柱１

「乱れがちになる夏休み、冬休みの生活リズムの確立を意識した取組について」

○ 提言の浦河町立浦河第二中学校の「朝活３０」の取り組みが、とても良いと思った。一人ではなくみんなで取り組んだことが良かったのでは。

○ 少年団や部活があることで自然と早く起き、夏休み中の良いリズムになっていた。

○ スマホやゲームの約束があることで、それを守って生活しようとしている姿がみられた。

○ 子どもと一緒に話し合い、自分でルールを決めさせることで自主的に守ることにつながっていた。

○「朝活３０」の取組は、みんなで取り組めることで励みになるのでは。

○ 部活や少年団の取組が朝早く起きることにつながっている

○ ラジオ体操のあとに、新聞を読む習慣が身に付いた。

○ 朝ご飯を家族一緒に食べるという家のルールが、早起きのリズムを作っている。

○ 子供がやりたいことを実現させるために、どうしたら良いのかと子供に考えさせるとよいのでは。

○ 親がランニングしていることを通して、子供にもじゃあ、自分はどうする？と問いかけるなど親の姿を見せることで子供も自然と自分の生活の過ごし方について考えられるようになるのではないか。

討議の柱２

「長期休業中の適度なメディア利用を防ぐ取組について」

○ ゲームをする時間分、勉強をするというルールにしたら、ゲームの時間を考えるようになった。

○ 視力の心配もあるので部屋にスマホを持っていかないというルールにしている。

○ ゲームよりも楽しいことに触れさせる→スポーツ、少年団など。

○ 夜９時になったら家の電気をすべて消すようにしていた。大人も一緒に環境を作ることが大切。

○ メディアにのめり込む理由→他人や時間に合わせて行動することが苦手。より考えなくていいスマホにのめり込むのでは。

○ 取り上げたりするのではなく自分で考えさせたい。

○ 学校ごとにルールが違ったり、家庭によっても違うので、PTAで共通のルールを作っていくと良い。

○ 今こそ大切にしたい対話の時間。人と直接会って話をすることが大切。大人もメディアやスマホに自分の時間を持っていかれていないか。

○ 子ども本人と話すだけではなくても、子どもがいるところで家族が話していると自然に会話に入って楽しむような空間を作ることができる。

○ 親が困っていることを夫婦で話すことはもちろんだが夫婦で話し合いづらいことはPTAで話し合うなど親同士のつながりも良い距離を持てていいのではないか。

第２分科会　助言者より分科会まとめ

助言者　宗谷健幸人プロジェクト代表　門間　奈月

はじめに

森校長先生の提言の中に、「お腹が空かないことと美味しい話は笑顔になる」という話があった通り、人は、生きていく上で「食べる・動く・寝る」がきちんと成り立つことで、感情・思考のバランスが取れる。

１ 生活リズムを整える

「光・暗闇・外遊び」、「早寝・早起き・朝ごはん」とともに、生活のリズムを整えるものとして、日本体育大学教授の野井信吾先生が提唱している「光・暗闇・外遊び」というキーワードがある。早寝するよりもまず、早起きをすることが１日のリズムを整えるために大切である。朝の光を浴びることが大切。そして、夜、寝るときは暗くする。日中は外で身体を動かす。そのことで「セロトニン」が出て、それが、夜寝るときに必要な「メラトニン」の分泌につながるという人間の体の仕組みになっている。

２「五感を使って学ぶ」ことの大切さ

「ラーニングピラミッド（学習定着率）」にあるように五感を使って学ぶことが大切。また、子どもは脳の後ろの方からだんだん育っていく。生きていくための脳である脳幹（爬虫類の脳）で睡眠や食事の欲求が満たされてから大脳辺縁系（哺乳類の脳）、つまり感情が働く。それも満たされることで大脳新皮質（人間の脳）思考・認知・言語の脳が働く。だから、生き物として大事な部分をちゃんと満たしていくことが、人間らしく生きていくためには必要。子どもがしっかり眠れているのか、自分の気持ちを自分で知ることできているのかなということが大切である。

３ メディア（スマホ・ゲーム等）との向き合い方

文部科学省の学校DX戦略アドバイザーなどを務める新保元康先生の話から。

「便利なものはメリットもデメリットもある。デメリットに目が行って、ルールをつくってしまいがち。でも世の中、便利なものがたくさん出てきている。それらを使いこなすことで安全に便利に使えるようになってきた。「火」は文化が栄えているこの現代においても牙を向くことがある。その危険なものを消防という形で消す対応をしている。

メディア、スマホ、タブレットなどの便利なものも危険な面はある。だから使わないということではなく、上手に使いながら、危険なものは「消す」ものを同時に考え発展させていくことが大切である。」

４「対話」と「今」の体感を大切に、大人も主体的に学び、つながり、伝え合うこと

今、子どもたちにとって「主体的・対話的で深い学び」が大切であると言われている。子どもだけではなく、大人も「主体的・対話的で深い学び」が必要ではないか。

今日の学びも、自ら実践して体感が自分の力になり、対話を通して人に伝えられるものになる。

「学習の五段階」にあるように、「意識的に覚え、繰り返し行い無意識的な習慣にしていく」ように、「今、自分はどの段階にいるかな？目の前にいる子どもたちは、今どの段階かな？」と考え、対話をしながら、トライ＆エラーを繰り返し、のびのびと安心してできるようになることを大切にしながら進んでいけたら良いのではないか。

「今」の連続が未来を創る。ぜひ、今までの「今」と「今（現在）」とこれからの「今」を大切に、PTA出会いを大切に、大人が生き生きのびのびと生活し、つながり合っていこう。

第３分科会【学校支援】

「学校・子ども・保護者が笑顔でつながり合える学校支援のあり方」

協議の柱

1．学校の実態に即した学校支援のあり方

2．連携が深まり、持続可能なこれからの学校支援

3．「語り合おう ～笑顔が広がるために」

	所属・役職名	氏　名	所属単P名，他
提言者・実践発表者	札幌市東区Ｐ連副会長	八乙女　伸江	札幌市立栄南中学校 PTA
	札幌市立栄南小学校前 PTA 会長	安田　康司	札幌市立栄南小学校 PTA
司会者	札幌市東区Ｐ連副会長	加藤　真里	札幌市立栄南小学校 PTA
	札幌市東区Ｐ連事務局長	村上　裕子	札幌市東区 PTA 連合会
助言者	稚内市 CS 統括 Co	本間　正博	宗谷・稚内市
運営者	豊富町 PTA 連合会 PTA 会長	菅原　真幸	豊富町 PTA 連合会
	猿払村 PTA 連合会事務局長	髙橋　正一	猿払村立 PTA 連合会
記録者	幌延町 PTA 連合会事務局	梅坪　敬一	幌延町 PTA 連合会
	幌延町 PTA 連合会事務局	平沼　智史	幌延町 PTA 連合会
運営委員長（分科会責任者）	猿払村 PTA 連合会会長	横山　脩兵	猿払村 PTA 連合会

第３分科会　提　言　要　旨

笑顔でつながり合える学校支援のために
～区Ｐ連ができること

提言者
札幌市東区PTA連合会副会長
札幌市立栄南中学校PTA副会長　八乙女　伸江

1.はじめに

札幌市東区に公立の小・中学校、義務教育学校は合わせて４０校あり、東区PTA連合会は「心身ともに健康な子どもを育てるために楽しくPTA活動を進めよう」をテーマに、各校のPTAと連携を図りながら活動を推進しています。今年は創立４０周年という節目を迎えました。コロナ禍を経て、PTA活動は一部で従来の形に戻りつつありますが、多くの学校では参加しやすさや参加の意義が感じられるような活動の工夫を模索しているところです。区Ｐ連は各PTA間の情報交流が活性化していくように、交流の場や方法の広がりを目指して活動しています。

2.各校で取り組む学校支援

東区内４０校に、改めて実施した学校支援に関するアンケートによると支援の内容として「登下校時の安全見守り」(58.3％)、「花壇整備・草とり・水やり」(54.2％)、「校内清掃」「環境整備」(ともに50％)が多く挙げられました。さらに「スキー学習サポート」「地域のパトロール見守り」が約40％と続きます。学習発表会や学校祭支援、地域行事への協力も約3割の学校で行われており、学校や地域と連携した活動も実施されていました。各PTAの活動から、学校の状況にあわせた様々な取組の工夫が見えました。

【多様な支援とボランティアの活用】A小学校の学校支援

安全の見守り、図書館支援、スキーや水泳授業の学習支援、校外学習の付添い、プールや教室設置扇風機の清掃、行事の支援と開催、学校運営協議会・地域学校協働活動への参加等、幅広い内容の学校支援を、ボランティアを導入して実施した。ボランティア導入後は参加率が高まり、活動へ参加した保護者から「楽しかった。」という声が多く聞かれるようにもなった。

【他機関との連携】B中学校の学習支援

学校からの依頼で、全校道徳の授業のために札幌市PTA共済会安全普及啓発事業に応募し実施した。当日は東日本大震災を体験した語り部を招待し、進行の手伝いをPTAが行う中、保護者と子どもたちがともに学び災害へ意識を高めることにつながった。

【つながりを生み出す場の創出】C中学校の行事支援

学校祭で保護者や地域の方を対象にカフェを設置した。PR活動の効果もあって当日は学校祭へ多くの参加があり、子どもたちの発表もたいへん盛り上がった。カフェも盛況で、コロナを通して希薄になった保護者や地域の方々のつながりを生む一助にもなった。

他にも様々な取組があり、人手不足や保護者の意識の変化など活動への課題がある中でも、「参加に自由度がある関わり方や場の提示」、「活動の内容や成果の可視化と情報共有」、「地域資源との連携」、「喜びや達成感の共有」等を考慮しながら、工夫に努める各校の足跡が見えました。

3.これからの学校支援　～区Ｐ連ができること

多くの学校では教職員の業務が多岐にわたり、人手不足が深刻化しています。その中で、保護者による支援は大きな力となり、多様な活動が学校運営を支えることにもなっています。人々のつながりが希薄になっている中で、子どもの成長を願い学校・保護者・地域がつながり合いながら活動することは、安全・環境・学びの質を高めるだけでなく、将来的に子どもを取り巻く地域社会を豊かにすることにもつながります。

東区Ｐ連は各PTAをつなぐ情報交流の場として、会長会・副会長会・出向委員会等において対面の交流の場を大切にすると同時に、会員の参加しやすさや効率性を考慮し、LINEワークスなどICTの活用も進めています。区Ｐ連や各PTA間のつながりがより豊かなものになるよう模索しているところです。

変化の激しい社会の中でも、子どもたちの笑顔を中心につながり合いながら、少しずつでも取り組める持続可能な学校支援のために、さらに研鑽に努めていきます。

第３分科会　提　言　要　旨

学校・子ども・保護者・地域が笑顔でつながり合える学校支援のあり方

提言者　札幌市立栄南小学校 前PTA会長　安田　康司

1. はじめに

本校は、札幌市東区北部に位置し、近隣には丘珠空港や札幌市営地下鉄の「新道東駅」、「栄町駅」があるアクセスの便利な立地となっています。
また、「さとらんど」、「モエレ沼公園」といった自然豊かな公園や札幌黄といった玉ねぎの名産地でもあります。

今年度で開校４９周年を迎える学校です。

2. PTA活動について

本校のPTA活動は、令和５年度より誰もが気軽に参加できるPTAを目指し、各委員会を自主参加制とし、PTA事務局の業務軽減を図ることを目的にPTAサポーター制度を創設しました。

PTA活動に参加できない、参加しづらいといった保護者の増加でICTの活用も推進しました。例えば、運営委員会などを書面開催として、学校のホームページや「すぐーる」などからお手紙や書類を確認できるようにしました。各委員会の連絡はLINEのオープンチャットを活用しています。

PTAでGoogleアカウントを作成し、委員さんからの連絡をメールでやりとりしたり、アンケートなどはGoogleフォームから集計をとったりしています。

PTA事務局内での情報共有は、グループLINEやLINE WORKSを活用しています。

ただし、人と人とのつながりや信頼関係の熟成は会ってみないと得ることができないので「Face to Face」の機会も大事にしています。

PTAの主な活動

事　業　名	
・資源回収 ・ふれあいまつり ・交通安全指導 ・校区見回り ・花トピア ・クリスマスツリー飾り付け ・イオン黄色いレシートキャンペーン	・栄南盆踊り体験 ・給食試食会 ・おやじの会主催事業 （運動会路上監視） （学習発表会路上監視） （栄南盆踊り企画・運営） （花壇整備） （えいにゃんらんど） （ドッジボール大会）

3. サタデースクールからはじまった「栄南盆踊り体験」

PTAとしての活動範囲は、学校との連携により教職員及び保護者に限っての活動となります。

せっかく学校を通して作り上げられたコミュニティーやPTA活動で培ったスキルを持った地域の方々と学校がつながるツールの構築が必要ではないかと考えました。

そこで本校では、平成３０年度からサタデースクール事業の一環として、「栄南盆踊り体験」を実施することになったことをきっかけに、おやじの会が中心となって企画、運営を行い、地域の方々へこのイベントに参画していただくよう呼びかけ、協賛やご協力をいただき開催することにしました。

令和７年度からは、コミュニティ・スクールという枠組みの中で「栄南盆踊り体験」を実施することになりましたので、より一層、地域の方々や町内会、企業、行政などと連携して学校支援の推進を図ることにしました。

4. 学校、保護者、地域と連携が深まり持続可能なこれからの学校支援

これからの学校支援は、地域と学校とのつながりが今まで以上に必要になると感じます。

地域学校協働活動事業は、「地域住民、学生、保護者、NPO、企業、団体等の幅広い地域住民等の参画を得て、学校を含む地域全体で子どもたちの学びや成長を支える、地域と学校が連携・協働して行う様々な活動のこと。」と謳っています。

保護者は子どもが卒業すると地域の人材になり、その人材が学校を支援することで、持続可能な学校支援ができるのではないか。

また、その地域の方々の姿を見て子どもたちがやがて大人になった時に、その地域や移り住んだ町でPTAや町内会に携わることにより新たな学校支援の循環が生まれるのではないかと考えます。

第３分科会　協　議　記　録

討議の柱１

「学校の実態に即した学校支援のあり方」

＜具体的な取組＞

- スクールガードや花壇整理など、子どもと関われる活動に取り組んでいる。
- 冬場の除雪、部活の支援、校区の見回りなど、地域に合わせた協力をしている。
- 図書館整理整頓ボランティア、防災教室、バザー（利益を教育活動へ還元）、制服リサイクル。
- ミニバレーボール大会で保護者がつながる。
- 運動会に保護者種目を導入して盛り上がる。
- 季節行事への協力（七夕、もちつき、祭り）。
  財源確保のため、廃品回収に取り組んでいる。

＜学校・PTAのあり方、関わり方＞

- 役職整理、メリット感、打ち合わせの簡略化などで活動の維持を図る。
- できるところで、できる範囲で関わろうという意識の持ち方が大事。
- 大人同士の横のつながりを生かした声掛けでつながる。地域も巻き込んでいる。
- 結局、自分たちが楽しめるかどうか、参加したいと思えるかどうかではないかそこがあれば、労力を注ぎ込めると思う。
- P・Tだけでなく、OB・OGの参加が多く大変助かっている。
- 地域の宝（産業や文化、人材）を頼りに「ＰＴＡは地域作り」という意識が広がって行く支援。
- 大きいことをいきなりではなく、小さいことからコツコツと導入していく。
- 教育目標や課題をわかりあった関係で、「ねらいや願い」がたしかに伝わるよう発信に工夫を。

討議の柱２

「連携が深まり、持続可能なこれからの学校支援」

＜これからの支援のあり方＞

- 事務局をＴでなくＰが動かす、自走していく。
- やれることを『大人のサークル活動」としてやっていき、そこに先生方も乗っかっていく。
- ボランティア制により続けてもらえる楽しい雰囲気をつくり、日常的なつながりを作る。
- 楽しんで活動できる魅力あり、親が楽しく活動する（頑張る）姿を見せることが大切。
- スタートは「何がしたいか（何ができる）」「子どもたちをどう育てていきたいか」を共有して活動していけると良い。
- コミュニケーションを第一に、行事の手伝いなど「みんなで何ができるか」考える。
- 日常からのＰＴＡ・学校との関わりが大切、学校・事務局の活動が互いに見えるようにする。
- ＰＴＡの良さを知らない人が多い。
  ＰＴＡは保護者の代表で学校と対等、学校と話あえる場として、たくさんのつながりを持つことが大切。
- 活動後の楽しみとして懇親会（飲み会）での達成感を味わうサイクルがあるといい。
- みんなでやる目的があることが大切「こんなことをやってみたいよね」という人がいれば、小さなことからもはじめられるよう、相互支援ができる関係が必要。
- 興味があるところに人が集まる研修に人が集まらないがミニバレーには人が来る。ここに何かヒントがある。研修でも興味があるテーマを。
- 「地学協働コーディネーター」としてＰＴＡのOBが行うのが理想。

第３分科会　助言者より分科会まとめ

助言者　稚内市CS統括Co　本間　正博

0. はじめに

校長が異動で変わることにより、ＰＴＡ活動の量と質が変動することは望ましくない。ＰＴＡ活動の方針と学校経営方針が連動していることが重要である。

1. 提言について

（1）札幌市東区PTA連合会

東区Ｐ連の活動は、組織図から分かる通り、「対面の交流」×「ＩＣＴ活用」＝「コミュニケーションの活性化」という連Ｐの役割の明確化により、子どもの笑顔を真ん中にすえた学校支援のあり方についての情報共有が促進された。

（2）札幌市立栄南小学校

「人と人、地域とＰＴＡの濃密なつながり」が「ＰＴＡづくりから街づくり」へとつながり、校区内における次世代の担い手づくりのしくみが生み出されようとしている。また、「できることから無理なく」「ＰＴＡの主人公である保護者が楽しく」「それでも必要なリーダーとその人への激励」というしくみが構築されている。

2. 協議のまとめ

学校はコロナ禍を経て、ＰＴＡ活動を縮小・精選してきた。以前と比較して、おおむね回復した活動もあれば、縮小・精選された活動もある。以前の活動の通り「復活させる」のではなく、学校・保護者・地域が「子どものため」「学校のため」に、地域を含めた活動へとつなげていくことが重要となる。

稚内市は、ＣＳというしくみの導入は管内で最も遅かったが、ＣＳというしくみを体現している「子育て運動」がすでに４７年前から取り組まれている。稚内市連合ＰＴＡも子育て運動の事務局団体として名を連ねてきた。現在は、「高齢化」「働き方改革」などをはじめとする現代の諸課題により、学校と地域の連携が難しくなっているという現実がある。

そこで、ＣＳというしくみに加えて、元ＰＴＡ役員・少年団関係者・町内会長・民生委員・地域の大学などの地域住民がＣＳを支援するサポーターとして「困っている子ども」「教室に入れない子ども」などの支援にあたっている。地域住民にとっても、自身の経験や技能を活かすことができ、生きがいや自己有用感につながっており、防災活動や地域行事への参加による地域の活性化が期待できるなど、学校・保護者・地域にとって大きな効果が期待できる。

本日の提言や活動報告を通じ、ＰＴＡ活動のよさと今後の課題や方向性が明確に見えてきた。同時に、学校の教育活動について、改めて多くのことを学ばせていただいた。

第４分科会【地域連携】

子育てを支える学校と地域とのつながり

協議の柱

1. 「地域・学校～人と人をつなぐキラリ☆人」

2. 「これからのＰＴＡの在り方を探る！」
～思い描く学校と地域の連携とは～

	所属・役職名	氏　名	所属単Ｐ名，他
提言者・実践発表者	白石区Ｐ連会長	安藤　慎也	札幌市立柏丘中学校 ＰＴＡ副会長
	白石区Ｐ連副会長	小林　秀子	札幌市南郷小学校 ＰＴＡ副会長
司会者	枝幸町Ｐ連　事務局次長	青柳　隆司	歌登小学校ＰＴＡ事務局長
助言者	稚内市教育相談所　所長	佐々木　康	稚内市教育相談所
運営者	枝幸町Ｐ連事務局	俵　あゆ子	歌登小学校長
	上記他 数名		
記録者	歌登小Ｐ副会長	大塚　真央	宗谷管内 PTA 連合会子育て委員
運営委員長（分科会責任者）	枝幸町Ｐ連会長	滝口　智也	歌登小学校ＰＴＡ会長

第４分科会　提　言　要　旨

「子育てを支える学校と地域のつながり」

これからのPTAの在り方を探る！
～思い描く学校と地域の連携とは～

提言者　札幌市白石区PTA連合会　会長　安藤　慎也

1．はじめに

少子化や共働き世帯の増加により、PTAや地域活動への参加者は減ってきています。

「忙しい」「役割が重い」といった理由は自然なことかもしれませんが、その一方で、学校・地域・家庭のつながりが少しずつ薄れていくようにも感じます。だからこそ、今あらためてPTAの存在意義や、これからのあり方を見つめ直す時期に来ているのではないでしょうか。

2．経験を通した気づき

（1）12年間のPTA活動を通して

私はこれまで12年間、PTAの役職や行事や運営などに関わってきました。その中で一番強く感じたのは、「自分は子どもにこそ育てられた」ということです。たしかに、忙しくて大変な時期もありましたが、仲間や先生、地域の方々との関わりが、私にたくさんの学びと気づきを与えてくれました。

（2）「保護者・地域・先生」が語り合い学び合う場として

PTAは単なる保護者の集まりではなく、学校や地域とつながる「対話の場」でもあります。関わり方は人それぞれでいいと思います。行事の一部にだけ参加する、地域活動に顔を出す、子どもと一緒に体験する―そんな小さな一歩から始められる仕組みがあれば、新しい楽しみや発見が広がります。

また、双方向の対話を重ねることで、「今の子どもたちに何を残すか」「未来の地域にどんな橋を架けるか」を一緒に考えられるようなかけがえのない場にもなります。

（3）大人にとっての成長する「もうひとつの学校」

PTAは、子どもたちの未来だけでなく、私たち大人の未来もそっと照らしてくれる存在だと感じます。「親になるための学校」ではありませんが、親として、そして一人の大人として成長できる場所です。仲間と本音で語り合い、学び合う時間は、自分をもう一度育ててくれるような大切なひとときです。

PTAは、大人にとって“もうひとつの学校”なのだと心から思います。そして、この“もうひとつの学校”での学びや出会いは、これからのPTAの形を考える上での大切な土台になっていると感じています。

だからこそ、変えていく部分と、ずっと大切に守っていきたい部分、その両方を見つめながら歩んでいきたいのです。

3．おわりに

無理に新しいものを生み出す必要はないと思います。先にお伝えしたように、PTAは子どもたちの未来だけでなく、大人の未来も照らしてくれる存在です。

必要に応じて形を柔軟に見直しながらも、受け継ぐべき価値はしっかり守り、学校と地域が新しい形で手を取り合えるPTAを、これからもみなさんと育てていきたいと思います。

第４分科会　提　言　要　旨

「子育てを支える学校と地域のつながり」

「地域・学校～人と人をつなぐキラリ☆人」

提言者　札幌市立南郷小学校PTA副会長　小林　秀子

1. はじめに

子どもたちが育つ環境には、必ず人とのつながりや関わりが不可欠ではないでしょうか。さまざまな環境で育つ子どもたちの為に、日々奮闘している大人たちの存在にフォーカスし、学校が考える地域連携とＰＴＡができる地域連携を皆様と共に考えていきたいと思います。

2. 繋がる地域の底力～活動の紹介～

合格祈願雪像つくり

読書ボランティア

『雪フェス』～雪合戦～

しごとの『ゆめ時間』

その他にも有志保護者による防災学校キャンプや街路樹花壇つくり、中学生による有志生徒会での地域除雪ボランティアなど…さまざまな活動が行われております。

3. 現状と課題

地域においては、高齢化もあり催事開催に地域役員だけでは立ち行かなくなり、縮小検討の実態もあるようです。ＰＴＡにおいても活動する上でここ数年、保護者や教師の意識も変化してきており、支障や困難な原因もあるのではないでしょうか。その上で、活動の視点や相互のアイディアを出し合う『対話の場』を工夫する努力も大切ではないかと、強く感じます。

4.「キラリ☆人」の声

★しごとの『ゆめ時間』主催の方からのお声

Ｑ子どもと共に何を学んでいますか？

⇒多くの職業があることを子どもたちに伝えつつ、参加する大人たちも異業種交流の場となっており、楽しんでおります。

Ｑこれから先、子どもと共に何を学んでいきますか？

⇒〝大人になること〟〝働くこと〟を子どもたちが楽しみと思えるように、〖知る＝面白い！〗の場を提供し続けたい。

★地域ボランティアをしている方からのお声

Ｑ子どもと共に何を学んでいますか？

⇒読み聞かせを行った際は、読み聞かせ後に感じたことを話してもらい、気持ちを共有することができます。

Ｑこれから先、子どもと共に何を学んでいきますか？

⇒小中学校に地域活動を通して経験したことを思い出として、『ふるさと』を大切にする心を育みたいと考えております。

5. 今後に向けて～未来の子どもたちにつなぐ～

先輩から引き継いだ〝想い〟をさらに進化・発展できる取組を、大人である私たちも子ども同様想像し、学んでいける場を。人とのつながり、想いの共有、楽しむことの大切さをつないでいける場を。

ＰＴＡがあるからこそできることがあるのだと思っております。

学校と地域、そしてＰＴＡがより良い関係で、子どもたちの〝居場所〟となる環境を作れるよう、これからの活動を楽しんで参ります。

第４分科会　協　議　記　録

テーマ：「子育てを支える学校と地域のつながり」

【提言１】地域・学校～人と人をつなぐキラリ☆人

提言者 札幌市白石区ＰＴＡ連合会　小林秀子

（１）ＰＴＡ活動は、学校・地域・保護者をつなぐ重要な架け橋である。「子どものために」という共通の目的のもと、立場や考え方の違いを超え、感謝と協力の心を持って関わることが連携の第一歩となる。

（２）非効率に見える活動の中にこそ、人と人とのつながりが生まれる。コロナ禍や働き方改革などの課題を抱えながらも、対話を通して新たな関係を築いていくことが大切である。

写真：各地区のキラリ☆人についての熱い討議

【提言２】これからのＰＴＡの在り方を探る
～思い描く学校と地域の連携とは～

提言者 札幌市白石区ＰＴＡ連合会　安藤慎也

（１）白石区ＰＴＡでは毎年「親子ふれあいコンサート」を開催し、１６校が参加する吹奏楽・合唱の祭典として地域に根付いている。

（２）コロナ禍で継続が難しい中でも、「できない理由ではなく、できることから始める」姿勢で挑戦し続けた。

（３）ＰＴＡは子どものためだけでなく、大人自身の成長と地域の絆づくりにつながる場である。

【主な協議内容】

（１）地域には、クラブ活動講師や商工会、福祉団体など多様な「キラリ☆人」が存在する。防災運動会などの取組を通じ、多世代の交流が広がり、子どもたちの社会性が育まれている。

（２）部活動支援や授業補助など、地域や保護者が学校に関わる機会が増えており、子どもたちの意欲や自信の向上につながっている。

（３）ＰＴＡ活動の担い手不足が課題となる中、役職名をなくすなど柔軟な仕組みづくりが求められる。保護者と教職員の橋渡し役として、ＰＴＡの存在意義を改めて確認した。

写真：それぞれの実体験に基づく感想や意見続出

【助言者から】

稚内市教育相談所　所長　佐々木　康

ＰＴＡは理想と現実の狭間にありながら、学校にとって心強い応援団である。コロナ禍を経て、その存在意義が再び問われている今、「できない理由」ではなく「どう続けるか」を対話し、地域とともに歩む姿勢が重要である。地域連携は保護者の成長にもつながり、コミュニティスクールなどを通して新しい形のＰＴＡを築くことが期待される。

写真：提言担当のキラリ☆人！白石区Ｐ連

第５分科会【食育・情報】

「会員のニーズに対応した情報発信と取組」

協議の柱

会員が主体的に参加するための地区Ｐ連の活動及び情報発信とはどういうものか実際に研究会を企画してみよう！！

	所属・役職名	氏　名	所属単Ｐ名，他
提言者・実践発表者	副会長	鎌本　かおり	旭川市ＰＴＡ連合会、北海道ＰＴＡ連合会
	副会長	踊場　啓通	旭川市ＰＴＡ連合会
司会者	副会長	中込　葵	旭川市ＰＴＡ連合会
	事務局長	鈴木　玲子	旭川市ＰＴＡ連合会
助言者	教育部長	芳村　桐子	稚内市教育委員会
運営者	利尻富士町 PTA 連合会事務局長	松本　ちひろ	利尻富士町立鴛泊小学校
	利尻富士町 PTA 連合会	平澤　芳史	利尻富士町立鴛泊小学校
	礼文町 PTA 連合会	本田　辰也	礼文町立船泊中学校
	利尻町 PTA 連合会	三原　美和子	利尻町立利尻中学校
記録者	礼文町 PTA 連合会	八木　博	礼文町立香深井小学校
運営委員長（分科会責任者）	利尻町 PTA 連合会	畑　慎司	利尻町立沓形小学校

第５分科会　提　言　要　旨

「会員ニーズに対応した情報発信と取組」

提言者　旭川市 PTA 連合会　鎌本　かおり
踊場　啓通

1. はじめに

北海道のほぼ中央に位置する旭川市は、豊かな自然と都市機能が調和する人口約33万人の都市です。有名になった「旭山動物園」をはじめ、美瑛や富良野、層雲峡温泉などの観光名所が近郊にあり、地元グルメの旭川ラーメンや新子焼、米を中心とした農産物・地酒なども有名です。飛行場があることから、道北観光の拠点として親しまれる都市となっております。

2. 旭川PTA連合会の組織と活動

市内75校（小学校50校、中学校25校）のPTA会員から組織され、さらに地区ごとに8つのブロックに分けて、総務部、事業部、研修部の各事業を輪番で担当していただいております。

総務部は総会や理事会、教育懇談会、広報紙コンクール、P連だよりの発行を担います。中でも旭川市・市教育委員会との教育懇談会では、各学校のPTA代表と教育委員会の担当者・教育長らが直接意見交換を行う大切な場になっております。

事業部の主な活動として、ブロック交流会とわくわくサマー体験が挙げられます。ブロック交流会では300名超の保護者と教員が集い地区ごとに交流を深めています。わくわくサマー体験は、体験プログラムを作り、子どもたちに楽しんでもらう宿泊研修会です。毎年大人気ですぐに定員になります。私たち自身が子ども達と向き合うことにより、子どもたちの思考の傾向や幸せ感を模索することが出来る貴重な機会になっています。

3. 研究大会の内容と成果

①PTA研究大会

研修活動による子育てに関する情報共有と会員自体の資質の向上を目的としており、大会の全体テーマを決め、そのテーマに添った参加者全員に向けた全体講演と、大会テーマを共有した複数の分科会のうちのひとつをご自分で選んでいただき、教育に関連した知識を身に付けてもらう場となっております。

昨年度は旭山動物園園長の坂東氏の全体講演をメインに5つの分科会を催し、350名超の参加者をお迎えしました。アンケートでもほとんどが肯定的な意見や、今後の企画に対する希望などが多く見受けられました。

②母親（保護者）研修会

『Power of smile』～幸せのエネルギーというテーマで毎年開催しておりますが、子どもに日々笑顔で向き合うためには、まず私たち大人が明るく元気な笑顔でいることが大切ではないかという考えから、リフレッシュできたり、心がワクワクするような研修内容を企画しています。

今年度は全体会に「ストレッチ」をはじめ4つの分科会を企画し85名ほどのご参加をいただき大盛況でした。参加された方が「楽しかった」と笑顔で帰宅されたのが印象的で、私たちも幸せな気持ちになりました。

4. 自分たちでつくりあげる研修会のために

自分たちで決めた大会テーマに添って、今自分たちが学びたいこと・学ばなくてはいけないことに向き合い、学びを実現してくれる講師を探すことが、私たち自身と私たちの住む地域を見直すことにつながります。会員自体が積極的に企画に参加していただくために、研修部の担当ブロックを輪番とし、さらに分科会ごとに小さなグループを作り企画と運営の担当をしていただいています。

母親研修会では、好きなことややってみたいことはなにか？に着目し、大人がわくわくできるちょっとした非日常が叶う分科会作りを目指しています。

また、ジャンル選定から、講師選び、会場設営まで、その年集まったメンバーから出た意見を元にメンバー中心で研修会を作り上げていきます。

5. 参加者が積極的に参加するために

沢山の参加者が積極的に参加し続けるプラスのループの研究大会にするには、その必要性を会員に実感してもらうことが必須です。そのためには会員のニーズに合った内容の講演や分科会を企画することが非常に重要です。

また、単位PTAだけでは中々実現できないことを、実現できることがあることも大きな魅力です。講演料が高い著名人を講師に招いたり、ワークショップの中でより多くの意見集約をしたいなど魅力は広がります。

母親研修会では、大人がわくわくするジャンルを選ぶこと、託児場所の設置、そして開催日時と時間を選び参加しやすい環境を作っております。

6. 結果

「自分たちが自分たちのための情報を得るために自分たちで取り組む機会を作る」ことにより、現在に至るまで研究大会や母親（保護者）研修会を持続させることができたのだと考えます。また、こういった活動を仲間と取り組むことこそが、私たちの人生の学びであり、子育てに対しての活力につながり、達成感などの喜びに繋がっています。

7. 今後の課題

会員数が年々減少し、予算も減り、働き方改革で教員の負担も減らさなければと、PTA活動に否定的な意見も見え隠れする昨今、会員に必要な情報を発信し続けることの他に、PTAの活動と組織そのものが、なぜ必要なのかということを丁寧に説明していくことも必要と考えます。

また、後に続く仲間を集い、必要性を伝えていくことが大切です。そのためには私たちの活動自体を「見える化」すると同時に「楽しく情報発信していく」ことが重要なのではないかと考えます。

協　議　記　録

協議の柱１

「会員が主体的に参加するための地区Ｐ連の活動及び情報発信とはどういうものか。」

○ 活動の中心を担う大人や参加する大人が、まずは楽しんで取り組むことが活動の活性化、そして子どもの健全育成の活性化につながるのではないか。

○ コミュニケーションが重要。同時に、親同士が楽しんで取り組むことが大切。

- 会員のニーズを受け入れつつ、親のハートを掴み、笑顔をもらう。
- アンケートなどを取って意見を集める。
- 地域や親を中心にしたイベントを開く。

○ 私たち自身が楽しそうに活動している雰囲気をどんどん見せていくことが大切ではないか。

○ PTA活動に対し「何をやっているのかよく分からない、少し難しいな」と感じている。「そんな難しいものじゃないよ、楽しいよ」という雰囲気を見せて、楽しく巻き込んでいく。

○ ＰＴＡ活動を進める上で「情報発信」の内容と方法を工夫改善していくことが必要だ。

○ ＰＴＡ活動の価値は、参加者が子どもたちの成長を一番近くで見られる機会である点にある。特に小規模な学校では、我が子だけでなく友達や小さい頃から知っている子の成長を見守る活動もある。

協議の柱２

「実際に研究会を企画してみよう！！」

●基本的視点

楽しんでまず企画して運営することが、子どもや周囲に伝わり、ＰＴＡを広げ、大人、子ども、社会が一つになる良い機会につながる。

●具体的な企画例

1. 自転車の安全と楽しさを学ぶ体験会
   今までにない乗り物が増加し、乗り方が厳格化・グレーな部分ある実態から企画。
2. 親子で心身の健康を作る年間プログラム
   ネガティブな傾向がある子どもたちの自己肯定感アップを目指す。1年を通したイベントとする。3ヶ月に1回程度、栄養学、スポーツ学、心理学、ストレッチなどをテーマに開催。
3. 親も子も巻き込む非日常的な企画
   ギネスに挑戦する企画等、親も子も巻き込み、興味を持ってもらう。
4. 異文化交流を兼ねた小規模料理会
   参加のハードルを低くするため、小規模・興味をひきやすい企画。
5. ゲームの開発者やYouTuberによる講演会
   単にゲームの面白さを語るのではなく、その中で勉強の大切さ等について話してもらう。

●参加の工夫

- オンラインの活用
- 参加費無料での実施
- 地域人材や地域にゆかりのある人材の活用
- 地域特性を生かし、町の活性化につなげる。
- 講演に限定せず、分科会形式等で交流の機会を確保する。

第５分科会　助言者より分科会まとめ

助言者　稚内市教育委員会教育部長　芳村　桐子

1.　討論の総括と企画の難しさ

協議の柱１では、具体的な活動の姿が示され、参加者が自身の活動に落とし込んだり疑問を持ったりする良い機会となった。

協議の柱2では、制限が一切設けられていなかったため、非常に難しいテーマであった。しかし、参加者の皆さんは、これまでの経験の積み重ねにより、目的を暗黙のうちに共有し、興味深い企画案を導き出していた。

2.　PTA活動の根源的価値と多様性への対応

「ＰＴＡとは何か？何のために、どこに向かっているのか？」というそもそも論を話し合う非常に有意義な場であった。

会員の家庭環境、仕事、子どもの状況などは様々であるため、会員の多様性にしっかりと寄り添うことが必要である。「参加しない」＝「関心がない」ではないという認識を持つこと必要。

3.　情報発信と参加のハードルを下げる工夫

（1）情報の質とターゲットを明確にする

情報発信には、内向き（会員向け）外向き（地域や学校以外）を使い分け、存在や意義を理解してもらい、ファンを増やすことにつながる。

参加を促す発信（呼びかけ、関心喚起）と、役立つ情報（保護者にとって有益な学び、生活情報）を分かりやすく、難しくなく伝えることが大切。

（2）参加のハードルを下げる方法

参加した人が得た充実感を、参加できなかった方々にも還元する仕組み（オンライン、録画のYouTube公開など）を構築すべきである。

活動者が感じる「やりがい」「楽しさ」「豊かさ」といったポジティブな側面が、なぜか「難しそう」「無理だ」「押し付けられる」といったネガティブな情報として伝わってしまう。NGワードを意識的に避けるなど、活動のイメージを改善するための話し合いが大切。

4.　PTAの社会的な意義と未来

ＰＴＡは日本一の社会教育団体である。

ＰＴＡは、地域社会の課題を自らの力で解決し、大人を育てる団体でもある。誰かのために動き、地域で力を活かせ、協力できる人を増やすことは、コミュニティの崩壊を防ぎ、次世代の地域を担う人材を育むことにつながる。

まだ子どもがいない若い先生からベテランまで、教員側も次代の地域を担うための成人教育の場としてＰＴＡ活動に関わっている側面がある。

先生と保護者が「子ども」という共通点で広く繋がるＰＴＡは、学びのレベルを引き上げる大きな強みを持つ特殊な組織。先生方にはPTAが新しい挑戦をする際の時間、場所、精神的なサポートを、ＰＴＡの皆さんには、どちらかに依存するのではなく、ＴとＰが一体となってお互いにしっかりと踏ん張って活動していくことを願う。

地域特性や学校規模が様々であるため、他地域の事例をそのまま導入するのではなく、できるところから始め、「変わらなければならないという危機意識」よりも「もっと面白くできる」という姿勢で、意識を高め、仲間と笑顔を増やす取り組みを進めていきましょう。

特別第1分科会【中学生討論会】

「明日も通いたくなる学校ってどんな学校？」

協議の柱

1．明日も通いたくなる学校にするために各校でどんな取組ができるのか

2．明日も通いたくなる学校にするために大人に協力してもらいたいことは何か

（令和7年度第1回子ども会議の様子）

	所属・役職名	氏　名	所属単P名，他
提　言　者	稚内南中学校校長	本　間　　到	稚内南中学校 PTA
司　会　者	稚内南中学校教頭	飯　田　　毅	稚内南中学校 PTA
助　言　者	稚内南中学校 PTA 会長	飯　沼　　剛	稚内南中学校 PTA
運　営　者	稚内南小学校 PTA 会長	伊 藤　弘 喜	稚内南小学校 PTA
	稚内港小学校 PTA 会長	中 陳　大 樹	稚内港小学校 PTA
記　録　者	稚内南中学校教頭	飯　田　　毅	稚内南中学校 PTA
運営委員長（分科会責任者）	稚内南中学校 PTA 会長	飯　沼　　剛	稚内南中学校 PTA

特１分科会　提　言　要　旨

明日も通いたくなる学校ってどんな学校？

提言者　稚内南中学校校長　本間　到

1　はじめに

現在の学校を巡る教育課題は多岐にわたっています。「いじめ」、「不登校」、「SNSの利用に関わるトラブル」など、学校には子どもたちの心理的安全性を確保することが急務となっています。

いじめの認知件数は全国でおよそ73万件、不登校児童生徒の数は34万人を越え、宗谷管内の各学校においても一定数の認知件数が見られています。同じく不登校児童生徒数も宗谷管内では140名を超える数が報告されています。

本分科会では、様々な状況で苦しんでいる子どもたちがいることを前提にしながら、大人だけでなく、子ども自身の力も活用して、「明日も通いたくなる学校ってどんな学校」をテーマに子どもたち同士の話し合いを通し、いじめのない学校づくりや、誰もが安心して通える学校をどう作っていくか、本音を語り合いながらその手立てを探り、各学校の実践を深めていくことを目的とします。

2　子育て平和都市宣言の街「稚内」

昭和50年代、全国的な荒れが学校に吹き荒れていました。稚内でも同様でした。この状況を打破すべく、家庭・学校・地域が手を取り合い、昭和61年に「ふるさとの次代を担う子どもたちのすこやかな成長と平和なまちづくりをすすめることは、すべての大人の責任である。」とし、子育て平和都市宣言が採択されました。これは全国的にも珍しく、令和の時代になってもこの宣言の趣旨は稚内市民の中に宿り続けています。時を同じく、子どもレベルでも「みんなが安心して通える学校を作ろう」を目的の一つとして「愛と平和を考える子ども会議」が発足しました。これは現在まで続いている活動で、名称は「子ども会議」と変わりましたが、根本の精神は引き継がれ、市内全ての小中学校の生徒会が中心となって一堂に会し、安心安全な学校をつくるために何ができるか考えています。

3　自分たちで学校をより良くする

学校の主人公は誰か、と質問したときに「それは児童生徒である」と胸を張って言いたい。そのための第一歩を本分科会が担い、次世代の稚内を担う子どもたちの財産にしたいです。中学生の考えをぜひお聞き下さい。

協　議　記　録

中学生討論会
「明日も通いたくなる学校ってどんな学校？」

●各学校の様子交流

- 毎月生徒会で全校でできるレクを企画している。
- いじめはないけど空気が良くない。下に見られることもある。学校のタブレットの使い方が悪い。
- 校舎建て替えのため、できないことが多い。だから自分たちがしたいことを職員室で先生方にプレゼンして要望をあげている。
- 廊下の壁にブラボーツリーの作成。感謝を伝え合う。
- 目安箱を設置して、悩み事などを聞いている。玄関前においている。みんなの前で回答できる内容なら昼の放送で流す。

●「通いたくない学校」とはどんな学校

- いじめがある、一部の人しか盛り上がる話しかしていない、クラスの人間関係が悪かったり、嫌がらせなどがある。
- 空気悪い。そういうときに問題おこる。

●どんな学校が「明日も通いたくなる学校」か。

- 授業が楽しい学校。（イベントだけで楽しくするのは限界がある。）
- 先生方が介入しすぎない学校。（自分たちに任せて欲しいこともある。）
- 自分で時間割や登校時間を設定できる学校。
- みんなでルールを守って平等が感じられる学校。（不要物の問題などがあって、自分は頑張っているのに、そういう人がいると元気がなくなる。）
- いじめやいじりがないのは大切。いじめは明るい学校を悪化させる。勇気を出して頑張って学校へ来た人をたたえる雰囲気が大切。

グループディスカッション①
（中学生とPTAの話し合い）

・具体的に楽しい授業とは？

→ 教師が生徒に伝えるだけの一方的な授業ではなく、双方向な授業。意見を言えたり、話し合えたりする授業。

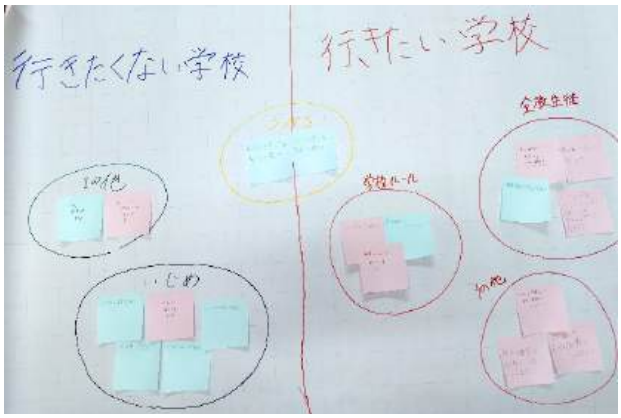
・北九州の学校では中学校の生徒会とPTAの役員での話し合いがある。どんな学校にしたいかを話したりする場がある。学校行事（イベント）をつくるために大人の力を借りるのも方法の一つだと思う。（例）運動会を良くしたい。

→ 自分の学校でもTシャツを作るときにPTA会長にプレゼンして通ったことがある。

・週明けからまた学校があるが、学校に行きたいと思うか？

→ 仲間がいて楽しいから行きたい。

→ 友達と話したいから行きたい。
負の面よりも楽しさや明るさに目を向けていたのが良かった！先生も混じって鬼ごっこしたり、カラーボール投げ合ったり、焼き肉したり、却下されるかもしれないけど、中学生の無限大の発想をいかしてワクワクを大切にしてほしい！！



特1分科会 助言者より分科会まとめ

■グループディスカッション②
（参加PTA同士の話し合い）

●各地域の実態交流

- いじめについて、人権にかかわる勉強を全校で学ぶ場を設けている。子どもから大人まで集まりふれあいを設ける場面もつくれたら、と思っている。
- 自分の子どもはスマホをずっと見ている。この前の参観日・懇談会でも話題に上がった。デジタルとはうまく付き合っていかなければいけないと感じている。
- 自分の地域も困り感を感じているPTAが多いので、PTA主催や学校運営協議会の力も借りて「ネット使用に関する学習会」を企画したい。

●「明日も通いたくなる学校」にするためにPTAとして何ができるか

- 親と教師との関係性も良好な関係を築くことができれば、子どもを通してコミュニケーションを取れる。
- 子どもにアンケートを採り、子どもたちのニーズに合わせたイベントをPTAとしても考えていきたい。
- 登校時間や自分で授業を選べる学校にしたい、という声も上がっていた。面白い発想だと思う。けど、実現したら先生方の働き方はどうなるのか、今でも大変なのは重々承知している。
- 保護者が自由に学校を歩いているところもある、と聞くことがある。担任の先生だけでなく、頼れる大人が多いのは子どもたちにとっても有益である。進路相談も話せる先生も増えると嬉しい。
- コロナが与えた影響はまだ残っていると感じる。行事が戻った学校もあれば、そうではない学校もある。話を聞いていて、子どもが楽しく感じるのは、学校がつくる安心感だったりもするのではないか。PTAとしては、そんな学校づくりに力を貸していきたい。可能であればみんなでできる企画も考えたい。できることを少しずつ進めたい。

■まとめ（全体講評）

自分が中学生の頃は、学校が荒れていて、保護者が見張りをしているような学校でした。しかし時代が変わり、今はそうではありません。大勢の子どもたちが楽しく通えている学校になっていると思います。そんな学校を作っているのは先生だけではなく、生徒も考え、自分たちで良くしたいと思っているからだと思います。

昨年の話ですが、行事で生徒全員が着るTシャツを作りたいからPTAの力を貸して欲しいと生徒会役員が私のところに来て、その必要性も含めて丁寧にプレゼンをしてくれました。そのとき私は「こんな中学生がいるのか」と感動し即決しました。

このように学校と生徒、PTAが協力して「明日も通いたくなる学校」をつくっていくひとつになるではないかと私は思っています。

これからも子どもたちのためにPTAとして学校を応援できるように力を尽くしていきます。

特別第２分科会【地域課題】

講演「命の参観日」

協議の柱

1．『多文化共生』「多様性を受け止めること」についての意見交流

2．講演内容についての感想交流

（令和６年度教育講演会の様子）

	所属・役職名	氏　名	所属単Ｐ名，他
提言者・実践発表者		玉城　ちはる	
司会者	潮見が丘小学校　教頭	小棚木　秀行	稚内市立潮見が丘小学校
助言者	潮見が丘小学校 ＰＴＡ会長	小寺　亘	稚内市立潮見が丘小学校ＰＴＡ
運営者	潮見が丘小学校校長	門脇　憲司	稚内市立潮見が丘小学校
	潮見が丘中学校 ＰＴＡ会長	澤村　慎太郎	稚内市立潮見が丘中学校ＰＴＡ
記録者	潮見が丘小学校 主幹教諭	阿部　竹志	稚内市立潮見が丘小学校
運営委員長 （分科会責任者）	潮見が丘小学校 ＰＴＡ会長	小寺　亘	稚内市立潮見が丘小学校ＰＴＡ

特２分科会

提　言　要　旨

テーマ　講演「命の参観日」

講師（提言者）　シンガーソングライター・家族相談士　**玉城　ちはる**

１　はじめに

稚内市では、令和６年６月に開催された「稚内市教育講演会」の講師として、玉城ちはるさんに講演をしていただきました。「ホストマザー」として約１０年間で３６名の留学生を支援した経験から、「多文化共生」、そして、「共に生きること」の難しさと大切さについて、講話と歌唱により伝えてくださいました。ぜひ潮見が丘地区の子どもたちにも、そして多くの大人たちにも玉城さんのお話を聞いてほしいと思い、１０月３日には潮見が丘小・中の児童生徒を対象とした講演会を、そして4日の全道PTA研究大会の特２分科会での講演をお願いしました。

２　「多文化共生」

「他者を理解し、違いを認め合う」ことや、「お互いを受け入れる」ことはとても難しいことです。玉城ちはるさんは、ホストマザーとして日本・中国・韓国の３つの国の子どもたちと１０年にわたり共同生活をした実体験をもとに、「相手の気持ちや価値観に向き合い、寄り添いながら対話を重ねていくことの大切さ」を、すてきな歌と軽妙なトークで会場に伝えてくださいます。また、講演の中で紹介してくれる「優しさ貯金ゲーム」を参加者でおこない、会場内には、相手への感謝と慈しみの気持ちがあふれます。

稚内市でおこなわれた講演会に参加した保護者・教育関係者からは、「子育ての悩み」「学級の子どもたちとの関わり方の悩み」「子どもたち同士の関わり方の悩み」に対する答えとなる内容だったと、大変好評でした。

現代を生きる子どもたちと向き合い、育てていく保護者・学校関係者にとって、とても励みとなる、勇気をもらえるお話を聞かせていただけるにちがいありません。そのお話を受けて、参加者の皆さんでさらに、子育てや子育て支援について、深め合うことができればと思います。

◎講師プロフィール

シンガーソングライター・家族相談士。24歳から「自身にできる社会貢献活動」として、10年間で約36名の留学生と養護施設出身者との共同生活を行う。

2014年1月、公益財団法人日本ユースリーダー協会「第5回若者力大賞」ユースリーダー賞を受賞。同年9月に初のフルアルバム『私は生きている』でテイチクエンタテインメントタクミノートよりメジャーデビュー。

現在「ホストマザー」としての経験を活かし、全国の小中学校・高校・大学で歌と講話の講演『命の参観日』を行う。これまでに２００校を超え、日本全国はもとより、中国、台湾、韓国の大学でも講演を行った。

『玉城ちはるのLINE相談 伴走支援』での相談も積極的に受け付け、登録者数２５００名以上。広島版ひきこもり支援ポータルサイト『ハルモニ@ホーム』のアンバサダーを務めるなど、本格的な引きこもり支援も行う。2022年からは群馬県三枚橋病院で精神保健福祉士補助者・通称アカンパニメントサポーター（相談支援者）としても活動を始め、２０２３年に相談スペース『こもれびカフェ』をオープン。

協　議　記　録

(1)各グループから発表

①第１グループ

人に相談する難しさ、相談したら周りを心配させてしまうからという話にも共感した。子育ての中で、「怒らないから言ってごらん」という場面もあるが、実際に子どもが話した時にやっぱり怒ってしまうこともよくある。それでも「よく言ってくれたね。」という言葉も一緒に返していくことが大切。

よいこと、改善してほしいことを話すとあったが、直してほしいことの方が、言葉の受け取りが強く感じるので、より良いところをいくつも重ねて伝えてあげることで関係が良くなるのかなと思った。

②第２グループ

玉城さんの講演を聞いた我が子が「すごい人が来た。歌がうまくて、きれいで、背が高くて」と報告してきた。それくらい心を動かされるような報告を親にしたことが素敵だなと思った。

ある地域では、幼稚園からずっと同じメンバーで大人になっていく。良いことも悪いことも共有できてしまい、関係が崩れると修復するのが難しいので、言い出せなかったりすることがある。

ある程度の年になったら札幌圏に進学するような地域では、一緒にいる時間が短く、伝えなければいけないことがあっても、関係が崩れることを懸念するというエピソードを共有した。

③第３グループ

相談することの大切さは、道教委からもSOS発信の大切さを子ども達に伝え続けなければならないが、子ども達の方が誰にでも相談しやすくなっている中で、周りの大人がポジティブに捉えられず、様々な相談の場所があるにも関わらず、門を叩く前に「必要ない！」となってしまっているとも思うので、相談することは良いことだ、ということをもっと広めていくことが大切、という話が出された。

「困ったらいいなさい」と言いながら、すぐ怒ってしまい、先日も「ごめんなんだけど、漢字のテスト68点だった」と言われた。相談されたのに「ごめんなんだけど」という言葉を使わせてしまったことに、玉城さんの話を聞いて「失敗したな」と思った。今日、3人の娘に会ったら、ギュッと抱きしめて「大好きだよ」と伝えたい。

④第４グループ

子どもによって同じ言葉を使っても伝わらないことがある。子ども一人ひとりに対して言い方や伝え方を変えていく必要がある。

先生の心が豊かであると、子どもの心も豊かになる。先生も心が大切だと思う。

子育てで悩んでいて、相談したいけど、なかなかできないことも実際にはある。

命の参観日という演題が衝撃だった。

(2)優しさ貯金ゲーム

玉城さんが紹介してくださった、コミュニケーション方法。①２人で握手をしながら、②相手の直してほしいところと良いところを言い、③もう一人も同じく言い、④お互いに(一緒に)「ありがとう」「ごめんね」「大好き」と言う。感謝・謝罪・愛情の気持ちを伝え合うことで、自己肯定感に繋がり、相手への安心・信頼、自身の強さ・優しさも意識できます。

特２分科会　講演まとめ

玉城ちはる氏による講演「命の参観日」

ホストマザーとして１０年間で30人以上様々な国の子どもたちと生活を共にしてきた玉城さん。生活していく中で、文化の違いによる感情のすれ違いが生じることもあったそうです。例えば、中国出身の子どもが食事の時にいつも残していて、玉城さんは「私のつくった料理が気に入らないのかな？」とずっと思っていました。ある時、ふとしたやりとりをきっかけとして玉城さんが「いつもいつもご飯を残して、そんなに気に入らないのならもう出て行きなさい！」というところまで感情をぶつけました。するとその中国出身の子どもが、自分の生まれた地域では、出してもらったご飯を全部食べてしまうのは《あなたのおもてなしではわたしは満足できない》という意味となって失礼なこと、だからいつも少し残して、《僕はあなたの作ってくれたご飯でお腹いっぱいになりました、食べきれないほどの料理を用意してくれてありがとう》という気持ちを表していたんだ、と伝えてくれました。

そこで初めてお互いの思いを知り、理解し合えたと語る玉城さんは、「自分の価値観を相手に押しつけるのではなく、対話をしていくことで相手を理解していくこと」の大切さを訴えます。《どうして親なのに私の気持ちをわかってくれないの》《友だちなのに》《先生なのに》…。同じ日本人であっても、親子であっても、黙っていては相手を理解することはできません。だからこそ、「自分の気持ちを言葉にする力」を身につけてほしいと話されました。

そして、もう一つ、身につけてほしい力は、「相談できる力」。思い悩んでしまうと、《どうして誰も助けてくれないの》《どうして自分ばかり》《きっと自分が悪いからだ》《こんなことを人に相談したら相手に迷惑がかかる》という思考に陥ってしまいます。玉城さんのLINE相談に送られてくる中にも、《これくらいのことを自分で解決できなくてごめんなさい》《こんなことで玉城さんの時間を使わせてごめんなさい》と、相談することが申し訳ないと感じている子がいるそうです。親や先生が子どもから相談されたときに、不安そうな顔で話を聞くと、《やっぱり相談したら迷惑なんだ》《相談することは悪いことなんだ》と思うようになってしまい、ますます相談できなくなってしまいます。そんな子に、相談できる力はとても大切なことであることを玉城さんは語りかけます。《自分が悪い》から抜け出して、自分を信じて相談すれば必ず誰かが助けてくれる、そうすれば人を信じられるようになり、周りからも信じてもらえるようになる、そんな自分を好きになり、周りの人も好きになる、そうすれば周りも自分のことを好きになってくれる…。

子どもも大人も、お互いの価値観や気持ちを理解するためには対話が必要不可欠で、そのために身につけてほしい2つの能力が、「自分の気持ちを言葉にする力」と「相談する力」です。他者理解はいのちに直結する話で、それぞれの価値観や気持ちに向き合い、対話をすることで、みんなの生きやすさにつながる、と玉城さんはお話しされました。

記念講演

演題

『戦後80年を迎えて
～沖縄と北海道から平和を願う～』

講師

みやざわ　かずふみ
宮沢　和史 氏

（シンガーソングライター、俳優、元 THE BOOM ボーカル）

【プロフィール】

1966年山梨県甲府市生まれ。1989年にTHE BOOMのボーカリストとしてデビュー。

これまでにTHE BOOMとしてCDを14枚、ソロでは7枚、多国籍バンド GANGA ZUMBAとして2枚リリースしている。2014年THE BOOM解散後、しばらく充電期間を持ち、2018年より歌手活動を再開。2022年は代表曲「島唄」を発表して30年、沖縄日本復帰50年にあたり、沖縄・日本本土で精力的に音楽活動を展開した。代表曲のひとつ『島唄』はアルゼンチンの音楽賞を３部門受賞。今なお広い地域で愛されている。

作家としては、中孝介、大城クラウディア、岡田准一、喜納昌吉、KinkiKids、小泉今日子、坂本龍一、島袋寛子、SMAP、高橋幸宏、ディアマンテス、夏川りみ、平原綾香、MISIA、矢野顕子など数多くのアーティストに楽曲や歌詞を提供。2024年にデビュー35周年を迎え、アルバム「～35～」をリリース。

現在 沖縄芸術大学で非常勤講師を務める。

記念講演　要旨

1　沖縄と自分との関係について

自分と「沖縄」との関係は、もともと興味をもっていた沖縄民謡について、歌手活動に生かしたいと思い、訪れたことから始まった。

それまでは、沖縄の戦争について、唯一地上戦が行われた場所などとは知ってはいたが、断片的な知識しかもっていなかった。

沖縄の人と接する中で、先の太平洋戦争の地上戦で沖縄の県民の４人に1人が亡くなったこと、アメリカ軍の駐留基地があることで地元の人が今も苦しめられていることなど、現在でも続く沖縄の人たちの痛みや苦しみを痛感するようになった。

また、沖縄の人たちが抱いている思いと、沖縄以外の日本人たちが考えている思いがあまりにもかけ離れていることに思い悩んだ。

2　「島唄」に込めた思い

THE BOOMの時に日本中で大ヒットした「島唄」。今では世界中で知られている歌だが、自分としてはこんなにヒットするとは思っておらず、はじめは全国に向けて発売する気持ちもなかった。

「島唄」を作るきっかけは、「ひめゆりの平和祈念資料館」を訪問した時に知り合った「ひめゆり学徒隊」で生き残った方との交流だった。

そこで自分は、沖縄の地上戦が、本土上陸を引き延ばすためだけに行われた戦争で、沖縄の住民が「捨て石」同然に扱われ、多くの人が犠牲になったことを知った。また、アメリカ軍の捕虜にされることを恐れ肉親同士で自決した悲惨な状況などについて、改めて思い知らされた。

そんなお話を聞かせていただいた生き残りの方に思いを馳せて作詞・作曲したのが「島唄」で、歌詞の一つ一つに沖縄の人が感じた悲しみの思いが込められている。

今、自分は日本をはじめ、世界中でこの歌を歌っているが、いつかこの「島唄」が歌われなくなったときが、沖縄に本当の平和が訪れた時だと考え、そんな時代が早く来ることを願っている。

3　今自分ができることに取り組んでいること

「島唄」を歌う時に弾いている三線。ある時、島の人たちから、「島唄」のブームがきっかけで三線を注文する人が殺到し、三線が手に入りづらくなっているという事実を聞かされる。「島唄」がヒットしたことで、少しは沖縄のために貢献していると考えていた自分はショックを受けた。

三線の棹の材料となっているのは、琉球黒檀の「黒木（くるち）」という木で、三線の材料になるまで成長するには、１００年以上掛かるということを教えられた。

自分にできることは何かということを改めて考えたとき、自分の命は１００年後まではもたないが、今生きている誰かのためだけでなく、将来の子供たちに対してできることは何かということを考え、２０１２年から『くるちの杜　１００年プロジェクト』をスタートし、「くるち」の植樹作業を行っている。

4　平和を願う思いを伝え続けること

プロジェクトから１０年以上が経過し、くるちの杜の「くるち」は順調に育っている。

１００年後２００年後に育った木で、未来の子供たちが三線を弾くことを夢見ながら、活動を広げていきたい、と考えている。

また、現在世界ではウクライナやガザなど、再び戦争が起きており、戦争を体験している人も減って、戦争の悲惨さが薄れてきているように感じる。

沖縄の人たちをはじめ、戦争で味わったつらい思いや悲しい経験を、これからを生きる子供たちが二度としなくて済むように、歌や講演、植樹活動などを通じて、今後も伝え続けていきたい。

記念講演　ご意見・ご感想

○ 歌手として認識しておりましたが、その内にはとても大きなものを秘め日本を思い、沖縄を思い、子供を思っていて、大変深く興味深く、分かりやすく、気付きを沢山頂きました。

○ 戦争の与えた影響がとても大きなものであったこと、未来に向けてできることについてお話を聞くことができ、もっともっと知ること、学び続ける人でありたいと思いました。

○ 戦後80年という年に、沖縄のこと、戦争のこと、そして「島唄」に込められた本当の意味を知り、改めて私自身も戦争ということについて知り考えたいと思いました。

○ 現在、オールドメディアによる誤った情報が伝えられる中で、この度の宮沢様のお話は実際に現地へ行き、現地の人の声を聞いた貴重なもので、自分の中でも大きな気付きを与えていただきました。この歴史を自分たちが様々に発信をすることで後世へ想いを紡ぎ、日本が真に平和になれることを節に願います。

○ 今日目が覚めたのは、この講演を聞くためだったのか。これまで生きてきたのは最後の島唄を聴くためだったんだ。そんな思いになりました。戦後80年、北のてっぺん稚内で人生で最高の時間を過ごせたこと、また、その機会を与えてくださった関係者の皆さまに感謝します。本当にありがとうございました。

○ 宮沢和史さんから沖縄やそこで起きた戦争の事実が真摯に語られて、大変考えさせられるものでした。私は沖縄で挙式、新婚旅行をしています。当時沖縄を数回訪れている友人に観光スポットなどを聞いたりしたのですが、友人によると南部は今でも戦争の爪痕が強く残っているので、新婚旅行ならあまり南部はおすすめしないと言われていました。その時のことを思い出し、講演を聴きながらそういうことなんだなあと妙に納得したりして。これからの世代にも、戦争の悲惨さと絶対に繰り返してはならないことを強く伝えていかなくてはと思います。

○ 子どもたちのために、改めて今を戦前にしてはいけないと感じました。

○ 沖縄戦について、まだまだ知らないことを実感しました。沖縄の方々の今もなお続く「我慢」のうえに私たちの平和は成り立っているということを知り、言葉にできない感情になりました。「島唄」を作成した思いもお聞きすることができ、その後の歌唱は、今までとは異なる気持ちで聴くことができました。私たち大人がこのような過去を知るということは、次の世代の子どもたちに伝えていく使命を手渡されたということなので、子どもたちには事実を伝えていかなければならないと感じました。稚内も九人の乙女など、太平洋戦争の犠牲を身近に感じることができる場所なので、これから歴史資料館などを訪れ、過去を知る努力をしていきたいと思います。

○ 宮沢さんの講演は、過去と未来、そして現在を考えさせられるテーマでした。沖縄出身の知り合いのことを思い出しながら、聞いていました。戦後80年という重みがずっしりと伝わってくる内容でした。とても貴重な時間となりました。

○ 厚みと深みがあり、とても聞きごたえのある講演でした。心を鷲づかみにされ、感情をゆすぶられるような時間でした。平和教育の大切さを再認識させられ、改めてお互いを尊重し合いながら生きていくことがどれほど重要なのかを考える機会となりました。この講演に参加することができたのは、とても幸せなことだったと思います。

○ 子育て平和の町稚内での開催に直結した内容ですばらしかったです。

○ 宮沢氏の講演について、同じ日本人、沖縄人でも「一人ひとり戦争は異なる」というお話しに感銘した。全くその通りだと思った。今後の自分の人生において、心に刻んでおきたい。

○ 平和学習に関しては、学校に依るところが大きいと思いますが、PTAや各家庭にもできることがあるのではないかと考えるきっかけになりました。

記念講演　ご意見・ご感想

○ 本校から参加した先生方から、年齢を問わず「良かった。」「沖縄のことをもっと知りたくなった。」等、元気が出る感想をいただきました。とてもありがたい機会でした。ありがとうございます。

○ これからの子供達が生きていく未来を考えた時に、平和への願いと戦争の惨さを伝えて紡いでいくことは絶対に必要なことだと改めて感じました。

○ 私が今回この大会に参加した理由は宮沢さんを拝見したかったからである。まずは宮沢さんに声を掛けてくれた運営者、そして快く引き受けてくれた宮沢さんに感謝を伝えたい。彼がなぜ沖縄に心を寄せるのか、それが深く伝わり、沖縄での活動をライフワークとしていることに誠実な人柄を感じ、益々ファンとなった。

○ すぐに実践に移すというのは難しいかもしれませんが同じ日本に住む国民としてまずは知っておくべき事であると感じましたので周りの人達にも話して、広げていくことから始めていきたいと思います。

○ 感動して涙が溢れました。何度か沖縄を訪問した経験があるため、わたしも同じ気持ちで沖縄の各施設を見ていたのですが、恐ろしい過去の失敗と私は封印していました。しかし、宮沢さんは、事実に向き合って、はっきりと話していたので、胸を打たれました。

○ 戦後８０年という節目の年に、とても大事なテーマの内容だったと思います。今も様々な国や地域で紛争があり、日本も戦後と言っていいのかと感じさせられます。沖縄で起きた事実はこれからも語り継がれなければならないと思いました。宮沢さんの経験をもとに話をされており、その語り口にはその時の思い・感情が素直に盛り込まれており、聞き入ってしまいました。また、島唄の詩に込められた思いが聞けて、とても良かったです。実際に歌ってくださった時には、その歌詞の意味をかみしめながら聴くことができました。とても良い講演でした。ありがとうございました。

○ 有名な方なので、講演を楽しみにしていました。静かに淡々とお話をされていましたが、宮沢さんの思いが切々と伝わってきて、涙が止まりませんでした。「島唄」という歌の背景にはこんな思いがあったのかと、教えていただくことで、戦争について、平和について、日本の国について考えることができました。ありがとうございました。また稚内に来ていただきたいです。そして、子どもたちにもお話をしていただきたいです。

○ 宮沢和史様の熱い想いや島唄の誕生秘話に心を動かされ、平和について改めて考える機会になりました。「いつかではなく今」という言葉が心に残りました。子育てにもつながる大切な気づきとなりました。

○ 良い歌だなと聞いたり歌っていたりした島唄にこんなに深い意味が込められているとは驚きました。戦争の捉え方は人それぞれあると思いますが、宮沢さんの講演を聞いた者として、島唄にこういう想いが込められているという事は私も誰かに伝えていかなければならないと感じます。沖縄には何度も行ったことがあるけれど次回はこの話を思い浮かべながら島巡りをしてみたいと思います。最後の歌声も感動しました。

○ 恥ずかしながら…はじめて知る戦争の内容もあり、心がグッと苦しくなるお話もありました。悲しいお話だけでなく、宮沢さんの落ち着いた声でとても聞きやすく時間があっという間に過ぎてしまいました。三線一本で聞いた島唄は忘れることができません。貴重な時間をありがとうございました。

○ 島唄のヒットで足りなくなった黒壇を100年かけて木を育てて作るプロジェクトに感動しました。もし質問の時間があったら、沖縄の人にとって「風」と「海」にはどんな想いが込められているのかを聞いてみたかったです。

○ 歌の意味を知り、沖縄の歴史を知り、とても考えさせられる講演会でした。素晴らしかったです。

大会スナップ①

第７２回日本PTA北海道ブロック研究大会
奈谷管内・稚内大会
地域と一緒に行う活動とは？

第７２回日本PTA北海道ブロック研究大会
奈谷管内・稚内大会
第３分科会　語り合おう～笑顔がひろがるために

大会スナップ②

第４分科会　領域(地域連携)
子育てを支える学校と
地域のつながり

第７２回日本 PTA 北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会

第７２回日本 PTA 北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会

大会スナップ③

「明日も来たくなる
学校ってどんな学校！？」
全国各地の実践例

「明日も来たくなる
学校ってどんな学校！？」
全国各地の実践例

第７２回日本 PTA 北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会

大会スナップ④

第72回日本PTA北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会　情報交換会

実行委員長
函館市PTA連合会会長
秋山 慎一郎

北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会　情報交換会

大会スナップ⑤

大会スナップ⑥

第72回 日本PTA北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会

第72回 日本PTA北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会

大会スナップ⑦

第72回 日本PTA北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会

第72回 日本PTA北海道ブロック研究大会
宗谷管内・稚内大会

大会スナップ⑧

ご来賓

■全体会来賓名簿

	ご所属・役職	氏　名
1	稚内市長	工　藤　　広　様
2	公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会　副会長	宿　南　洋　一　様
3	北海道教育委員会　教育長	中　島　俊　明　様
4	北海道教育庁　宗谷教育局長	笠　井　　浩　様
5	稚内市議会　議長	吉　田　孝　史　様
6	稚内市教育委員会　教育長	佐　伯　達　也　様
7	北海道公立学校教頭会　会長	照　井　志　暢　様
8	宗谷公立学校教頭会　会長	飯　田　　毅　様
9	宗谷校長会　会長	吉　﨑　健　一　様
10	稚内市教育委員会　教育部長	芳　村　桐　子　様
11	稚内市教育委員会　地学協働対策監	山　川　忠　行　様
12	記念講演　講師	宮　沢　和　史　様

大会役員名簿

役職名	所属名		氏名
大会長	北海道PTA連合会	会長	廣瀬堅一
副大会長	札幌市PTA協議会		髙原周作
大会委員	北海道PTA連合会	副会長	漆崇博
			安達仁
			秋山慎一郎
			松野史寛
			髙橋梨絵
			鎌本かおり
			清水武志
			内海洋
			岡田一之
	札幌市PTA協議会	副会長	林川希
			先名孝亘
			朝野由紀
			佐々木文矢
			千葉香織
大会事務局	北海道PTA連合会	事務局長	城野文久
	札幌市PTA協議会		山本豊
	北海道PTA連合会	事務局次長	出村好孝
			椿野次雄
			山村健史
	札幌市PTA協議会		櫻田豊

実行委員名簿

大会役職名	宗谷管内PTA連合会役職名	氏　名
実行委員長	稚内市連合PTA　会長	出村　賢志
副実行委員長	宗谷管内PTA連合会　会長	滝口　智也
	宗谷管内PTA連合会　副会長	横山　脩兵
		松浦　幸太
		澤里　尚広
		菅原　真幸
		喜瀬　乗太
		長谷川　直也
		入井　一美
		対馬　諒
実行委員	枝幸町PTA連合会　事務局長	俵　あゆ子
	猿払村PTA連合会　事務局長	髙橋　正一
	浜頓別町PTA連合会　事務局長	後藤　大地
	中頓別町PTA連合会　事務局長	宮崎　哲也
	豊富町PTA連合会　事務局長	森本　尚
	幌延町PTA連合協議会　事務局長	菊地　俊雄
	利尻町PTA連合会　事務局長	山本　真司
	利尻富士町PTA連合会　事務局長	松本　ちひろ
	礼文町PTA連合会　事務局長	本田　辰也
事務局	事務局長	川原　修子
	事務局次長	杉本　旬
	会計	二浦　史子

編 集 後 記

季節外れの暖気で暖かい日差しの中、『てっぺんから広げよう！子育ての輪と和と話』を大会スローガンに、全道各地だけでなく遠くは九州から多くのＰＴＡ会員及び教育関係者の皆様にご参加いただき、盛会の内に「第７２回日本ＰＴＡ北海道ブロック研究大会宗谷管内・稚内大会」２日間の日程を無事終了いたしました。これもひとえに大会役員を始めとした運営に関わられた皆様のご尽力の賜物と心から感謝申し上げます。

近年、社会の状況がめまぐるしく変化し予測が困難と言われる中、まさにその社会を生き抜く子ども達の成長を支え、応援する我々ＰＴＡ会員の役割と組織のあり方もまた、新たな転換期にあると感じられます。本大会では、よりコンパクトな運営を心がけ、運営者と参加者の両方の負担を軽減することを目指しました。しかし、各組織のあり方や運営の仕方が変化しても、各地区で地域・家庭・学校が手を取り合い、子育てについて力合わせをすることの意義と価値は変わりません。

「未来を担う子どもたちの今とこれからの幸せ（well being）を願い、学び合い、連携し合うPTAをめざして」を大会主題として開催された本大会で学び、感じたことが各地区の子育てに関わる方々の新たなＰＴＡ活動のための一助となりましたら幸いです。

結びになりますが、本大会へのご参加及びご協力、また大会集録へのご寄稿を賜りました全ての皆様に感謝申し上げ、編集後記といたします。

２０２５年１２月

第７２回日本ＰＴＡ北海道ブロック研究大会

宗谷管内・稚内大会実行委員会

次期開催のご案内

第73回　北海道ブロックＰＴＡ協議会研究大会

道　南　大　会

＊ スローガン「 親も子も 笑顔になれる 学びと子育ての みちしるべ

～過去から受け継ぎ 今を楽しみ　未来を語ろう～ 」

＊ 主　題　『 親と子どもの豊かな成長をめざして 』

＊ 期　日　令和８年 10 月 10 日（土）～11 日（日）

＊ 会　場　分科会・講演会　函館市民会館　ほか

懇親交流会　ホテル函館ロイヤルシーサイド

PTA 活動は、大人同士が立場や経験を超えて意見を交わし、人間力を高めるかけがえのない場です。他者の声に耳を傾け、自らの言葉で発信する。それを楽しみながら繰り返すことで、私たちは一人の人間として大きく成長します。

その生き生きとした大人の背中を子どもたちは見て、「PTA ってなんか面白そう」「大人になるのって楽しそう」と自然に感じ、自らの知見を広げていくでしょう。未来は予測不能だからこそ、大人として、失敗を恐れず挑戦する姿を自ら示し、子どもの「やってみたい」という気持ちを育むことが求められます。

この大会では、過去から未来へ大切に【受け継ぐべきもの】と、時代に合わせて柔軟に【変えていかなければならないもの】を見極める知恵を共有します。親がまず行動することで、子どもたちの未来を力強く切り拓く一歩となるのです。

函館市ＰＴＡ連合会・渡島ＰＴＡ連合会・檜山ＰＴＡ連合会で組織する３ブロックが合同で主管となり、準備しております。ぜひ道南へお越しください！